

十全同窓会会報 181

2022 / 5



目次 | CONTENTS

卒業生に贈る言葉……………03	金沢から世界へ発信……………15	病院紹介……………24
就任挨拶……………04	受賞……………16	教室だより……………26
退職のご挨拶……………12	学会報告等……………19	医師国家試験結果……………30
退職記念講演会……………13	十全学術行脚……………20	学生コーナー……………31
中西功夫名誉教授を偲んで…14	支部だより……………23	令和4年3月卒業生進路 ……32

2022年度 金沢大学医学部十全同窓会総会

日時 2022年7月2日(土) 午前9時
場所 十全講堂

式次第

- 一、開会の辞
- 一、議長選出
- 一、議長挨拶
- 一、物故会員に対する黙祷
- 一、報告
 - 一、医学系・医学類報告
 - 土屋 弘行 理事長
 - 杉山 和久 医学系長・医学類長
 - 一、医薬保健学総合研究科報告
 - 絹谷 清剛 医薬保健学総合研究科長
 - 一、先進予防医学研究科報告
 - 田嶋 敦 先進予防医学研究科長
 - 高安賞贈呈式
- 一、支部紹介
- 一、議案審議
 - (一) 2021年度事業及び決算報告
 - (二) 監査報告
 - (三) 2022年度事業計画及び予算(案)
 - (四) 役員改選
 - (五) その他
- 一、閉会の辞

《教授就任記念講演》

低侵襲外科学のあゆみと将来展望	消化管外科学／乳腺外科学	稲木 紀幸 教授
生理と疾患病態における血管の細胞多様性の理解を目指して	血管分子生理学	内藤 尚道 教授
外科病理学とゲノミクスの融合	分子細胞病理学	前田 大地 教授
造血管腫瘍の最新治療と今後の展望	血液内科学	宮本 敏浩 教授

◇教授就任講演は、医薬保健学総合研究科医学博士課程の「Up-to-dateセミナー」として認定します。

卒業生に贈る言葉



医学類長

杉山 和久

卒業生の皆さん、金沢大学医学類のご卒業、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。この2年間の学生生活は、コロナ感染症のため十分な実習ができず、教員として心苦しく思います。これから研修医としての新しい生活がスタートします。今までの医学生としての勉強は医師になるための準備であり、これからが医師としての実地の勉強です。卒業生全員が同じスタート台に立ったと言えましょう。

私は1984年に金沢大学医学部医学科を卒業しました。学生時代に、「最初の10年は大事だから死にものぐるいで頑張れ」とある内科の教員に言われました。また、私が入局した眼科学教室の医局長からは、「最初の6年で一生の臨床力が決まる」とも言われました。これは本当だと実感しています。若い時に実地臨床の基礎力を身につければ、あとはそれに

上乗せで行けます。

「同僚、先輩、後輩の症例でも勉強する」これは旧第2内科教授であった竹田名誉教授が講義の時に述べられました。自分1人の経験できる症例は限られています。人の症例で勉強するのです。それにはいい方法があります。当直の時や、時間の空いた時に、病棟の全症例のカルテを読み込むのです。当時眼科病棟には40人の患者さんがいましたので、週1回の当直の時に全員のカルテを読みました。すると治療経過、検査所見など、診断から治療、管理まで手に取るようになりますし、週1回の教授回診が楽しくなりました。

医学教育は卒業した後の方が大事です。特に、入局後の専門研修では、専門医を取得するために必要な内容を学ぶため、力を入れてください。医師国家試験はほとんどの学生が合格しますが、専門医の取得試験の合格率は7割程度です。学会に参加したり、論文をまとめたりするほか、筆記試験に面接と大変ハードルが高いと思います。専門医の資格を取得した後、さらに高度な知識や技術を学ぶ必要があるため、一人前の医師になるには、医学部卒業後10年はかかります。もちろん、大学院に進んで本格的に研究を行い医学博士の学位を取得することも重要です。

私は学生時代に金大城内キャンパスのESS(English Speaking Society)に所属したものの、途中で挫折して、英会話は苦手でした。ところが、入局した眼科の教授は日系米国人かと思うほど英語が堪能で、舌を巻きました。それに奮起し

て英会話を一生懸命勉強して、米国オレゴン州ポートランドに留学しました。世界の人々とコミュニケーションをとるのは楽しいですし、若いうちから英会話を勉強して、世界に羽ばたいて欲しいと思います。

最後に私の卒業生に贈る言葉は、「人との出会いを大切にすると」「ポジティブ思考が成功の鍵」です。若い先生方には学生時代や卒業後の友人や尊敬する先生との出会いを大切にしてほしいと思います。医学部の6年間で知り合った人は、医師になってからも一生付き合うことになる人たちです。また、他大学や海外の先生との交流を通じて一生の友達をつくってほしいと思います。最近の学生の中には、人とのコミュニケーションが苦手な人も少なくないでしょう。一生の友を得るための秘訣として、私のアドバイスは、人の言うことを悪く解釈せず、できるだけ良い側面を捉えることが大切だと思います。言葉には二面性があり、言われたことをアドバイスとポジティブに受け取るか、ネガティブに受け取るかで、その後の展開は全く違って来るでしょう。人の良い面を受け入れて、何でもポジティブに受け取ることで、そして物事をポジティブに受け止めて行動する「ポジティブ思考」こそが、人生の成功の扉を開く鍵ではないかと思っています。また、師との出会い、友との出会いが人生にとって、大きなプラスになると思います。卒業生の皆さんの今後の発展を祈念しております。

就任挨拶



和田 隆志 博士

(昭和63年卒業)

学生や教職員が 誇りと愛着を持ち、 人が輝く金沢大学へ

このたび2022年4月1日付けで、皆さまのご推挙とご支援により金沢大学の第12代の学長職を担当することになりました。これまで、十全同窓会ははじめ金沢大学医学部(医学系)関係の皆さまから賜りました温かいご指導とご厚情に改めて心より御礼を申し上げます。

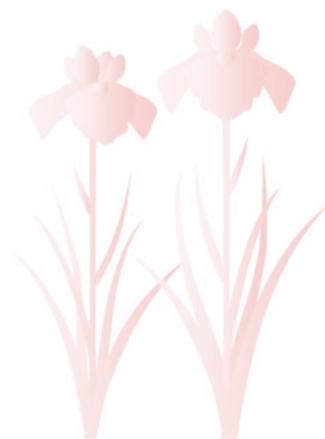
これまで金沢大学は、十全同窓会の皆さまはじめ、先達が築き上げてきた歴史と伝統を礎に、絶えず新たな道を切り拓いてまいりました。2022年度からは新たな第4期中期目標・中期計画期間が始まりました。この中で、教育と研究の一層の連携強化を目指し、「未来創成教育環」を基軸とした教育、「統合創成研究環」を核とした研究の新たな推進システムを構築しました。教育と研究を一体的に捉えた機能強化を行い、大学改革と人材育成の「金沢モデル」を目指しています。

金沢大学長に就任

就任にあたり、今後も志高く、オール金沢大学で邁進し、更なる飛躍にむけた挑戦をする決意と覚悟を新たにしています。皆さまとの連携を深め、金沢大学がこれまで以上に地域に愛され、世界に輝く大学であるように全力を尽くします。

金沢大学の持続的な発展や社会貢献のために、医学系の果たす役割はとても重要といえます。そのためにも、医学系・医学類・附属病院が一丸となり、獨創性・多様性ある優れた研究を進展させることが基盤になります。くわえて、よりよい教育環境の整備と醸成を円滑に進めています。2022年1月には一般社団法人日本医学教育評価機構(JACME)による国際基準に基づく医学教育分野別認証評価(国際認証)も受審致しました。国際標準となる教育環境の整備も進んでいます。国内ならびに国際的な交流、連携を通じて、世界の医学・生命科学・医療をリードする人間性豊かな医師、医学研究者のリーダー人材の育成を目指すことが求められます。さらに、先鋭的な医学研究に裏打ちされた高度医療、最後の砦としての拠点機能強化により、地域のウェルビーイングにも益々貢献できると思います。

「学生や教職員が誇りと愛着を持ち、人が輝く金沢大学」として、さらなる発展を成し遂げられるよう、熱意と不撓不屈の一心にて取り組みます。引き続きまして、十全同窓会の皆さまの温かく力強いご支援を賜るとともに、ご高導、ご鞭撻のほど何とぞよろしくお願い申し上げます。最後に、同窓会の皆さまのご健勝と益々のご隆昌を祈念致します。





大竹 茂樹 博士

(昭和52年卒業)

金沢大学のさらなる 発展に向けて 誠心誠意頑張る

令和4年4月1日付けで、総括・大学改革・附属病院担当理事・副学長に再任されました。これまで同様、校友会・金沢大学基金、融合研究域長・学域長を兼務し、新たに危機管理と法務・知財担当が加わりました。若い和田新学長の下、金沢大学のさらなる発展に向けて誠心誠意頑張ります。十全同窓会の皆さまには、ご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

令和3年度に融合学域に設置した「先端学類」に続いて、令和4年度に「観光デザイン学類」を発足させました。令和5年度には「スマート創成科学類(仮称)」を設置予定です。この学域は、文理融合型教育とアントレプレナーシップ教育を実施し、「超スマート社会Society 5.0」の実現による経済発展と社会課題解決を志し、国際的な展開力を持ち、これからの

金沢大学理事・副学長に再任

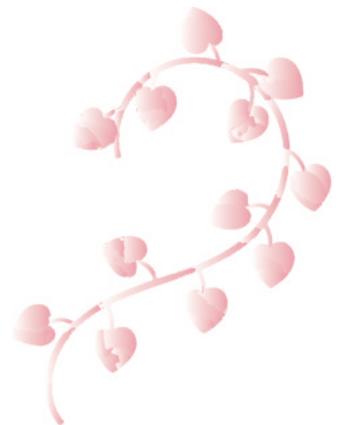
社会変革を先導する人材の養成を教育目標としています。十全同窓会会員の教員も参加しています。また、地方創生に寄与することを目指して、100名の定員増を申請致します。

附属病院では、内科と外科の再編・統合が終了し、新任教授を迎えて今後一層の充実が図られます。新機能強化棟は、地鎮祭も実施され、令和5年9月の完成を目指して増築工事が開始されました。高機能手術室、がんゲノム医療関連部門、最新の画像診断部門や外来化学療法室の設置を予定しており、令和6年春の使用開始を目指して整備致します。

この2年間は新型コロナウイルス感染症への対応に追われました。附属病院では、新型コロナウイルス専用病棟を用意し、COVSAT(COVID-19 Special Assistant Team)と名付けられ、医師、看護師、薬剤師、臨床工学士、理学療法士から成る専門チームが、県内の重症患者を引き受け大活躍しました。手術や入院の一部制限を実施せざるを得ませんでした。お陰様で公的な補助もあり病院経営は順調でした。大学本部でも医療系免許を持つ教職員のご協力により2回にわたって新型コロナウイルスワクチンの職域接種を実施致しました。

今後は医師の働き方改革への対応が大きな課題となります。附属病院は「連携B水準」を申請致します。医師の派遣にも影響が出るため、関連病院や行政機関とも十分な情報共有を図っていく所存です。

十全同窓会の皆さまには、力強く温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。



就任挨拶



堀 修 博士

(特別会員)

先を見据えた研究力強化と 人材育成を推進

この度、金沢大学医薬保健研究域長・学域長を拝命いたしました。私はこれまで6年間、医薬保健学総合研究科長として、高度医療人材および基礎研究者の育成に尽力してまいりました。この経験を活かし、医薬保健研究域・学域におき

金沢大学医薬保健研究域長・学域長に就任

ましても、今後10年、20年先を見据えた研究力強化と人材育成を推進したいと考えております。以下、具体的なプランを書かせていただきます。

まず、研究面については、大学本部とも連携し、医薬保健各分野における先鋭的な研究の発掘、および融合的な研究の推進に取り組み、新たな共同研究グループによる大型の外部資金獲得を目指します。また、社会実装を踏まえ、融合研究を加速するプラットフォームである医薬保健研究域内センター「AIホスピタル・マクロシグナルダイナミクス研究開発センター」の発展にも尽力いたします。

教育面については、その多くが国家資格と連動する医薬保健学分野においても、コア・カリキュラムのみにとらわれない、新たな融合教育を推進します。例えば医学類におけるメディカルリサーチトレーニング(MRT)プログラムでは、学士課程における継続的な研究活動を選択科目として認定し、個々の学生のレベルに合わせた多様な教育を可能にしています。また、2021年

に設置した医薬科学類においては、広い視野と高い研究実践力を持つ医学・薬学研究者を育成するため、早期からラボレーションおよび研究室配属を実施します。最終的に学士課程から大学院にシームレスにつながる融合教育を目指します。

国際交流においては、コロナ渦で培ったオンライン交流の技術も活用し、これまで以上に積極的に展開していきたいと考えております。その意味で、本年3月に金沢大学医学系大学院、附属病院を中心に英語で紹介するビデオを作成いたしました。近日中に医学類・大学院のホームページにアップロードする予定ですので、よろしければご覧いただけますと幸いです。

私はこれまで、特に、研究科内外の連携、迅速な情報共有を意識して研究科長業務にあたらせていただきました。今後も人のつながりを大切に、医薬保健研究域長・学域長の業務に精一杯取り組ませていただきたいと思います。十全同窓会の諸先生方におかれましては、何とぞご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



田嶋 敦 博士

(特別会員)

先進予防医学研究の グローバルな発展につなげたい

令和4年4月1日付で、大学院先進予防医学研究科長に再任いただきました。本学の基本理念である「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」を目指す上で、高度で先進的な教育・研究を実践する場としての大学院の重要性はますます

金沢大学大学院先進予防医学研究科長に再任

高まってきております。そのような中、2年任期の2期目を務めさせていただきますことになり、大変光栄に存じます。

ご存じのように、大学院先進予防医学研究科は、千葉大学、金沢大学、長崎大学による先進予防医学共同専攻(医学博士課程)をもち、オミクス情報からマクロ環境情報まで個人と環境の特性を網羅的に分析・評価し、0次予防から3次予防までを包括した個別化予防を実践できる博士人材の育成を目的として平成28年4月に設置されました。自身の1期目の任期2年間(令和2~3年度)の3大学の取り組みを振り返りますと、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)への対応に迫られた面はございましたが、COVID-19蔓延下においても、千葉大学・長崎大学との連携の下、先進予防医学共同専攻で独自に構築しておりました3大学共同の遠隔講義システム等を用いて共同教育課程における教育を滞りなく実施することができました。令和3年度には、3大学の教職員の協同により、先進予防医学共同専攻の自己点検・評価な

らびに外部評価を実施いたしました。その結果は、現在研究科ホームページで公開しております。共同専攻としましては設置後初の外部評価となりましたが、評価結果等をもとに改善に取り組み、より魅力的な共同教育体制作りに尽力する所存です。

研究科の研究面では、ハインリッヒ・ハイネ大学、千葉大学および長崎大学と毎年共同開催している「日独合同予防医学シンポジウム」をきっかけとし、先進予防医学研究センターと連携して、個別化予防にかかる国際共同研究を推進・発展させるための基盤を形成することができました。本学の給付型奨学金を伴う博士人材プログラム(卓越大学院、次世代精鋭人材創発、研究者育成フェローシップ)を活用して優秀な学生を確保し、国際的に活躍する専門的研究者、実務家双方の育成を加速させるとともに、先進予防医学研究のグローバルな発展につなげていきたいと考えております。

十全同窓会の諸先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願いいたします。



絹谷 清剛 博士

(昭和61年卒業)

国際競争力の強化を目指し 一枚岩となるべく努力したい

このたび、医薬保健学総合研究科長を務めさせていただくこととなりました。私は、1986年に本学医学部を卒業し、久田欣一教授主催の核医学教室に大学院生として加わりました。研究者としての端緒を過ごした研究科の科長を務めることにな

金沢大学医薬保健学総合研究科長に就任

ることに喜びを感じます。一方で、2006年に研究科会議末席に加わって以降、主に病院用務を仰せつかってきました。2012年以降は、副院長あるいは病院長補佐として、3代の病院長に比べ、病院内の事柄は理解したように思います。翻って研究科に目を転じると、そのあり方を十分理解したとはいえない状態です。しかし、和田新学長ほか、複数の方々とお話をさせていただくと、本研究科のみならず、医学系全体の地盤低下が強いことが分かってきました。たとえば、大学の超然・先駆・自己超克プロジェクトでの採択、大型外部予算採択状況を見ると、理工研究域、新学術創成研究機構の方々のものがほとんどです。

本研究科の目指すべき方向は、社会の変化にかかわらず一貫しているものと考えます。国や大学などの方針にある国際競争力の強化に尽きます。現在、個々の教員・講座の単独の活動では世界に太刀打ちできない状況になっています。外部資金を獲得するにも、学内複数講座連携、医薬保健学域内連携、理工・人社会学研究域等との異分野連携、

学外連携、国際連携等々幅広い連携が求められます。研究で得られた知財を展開するには、産官金との連携が不可欠です。このようなことを深化させてこそ、和田新学長が強調されている国際的視野をもったイノベティブなリーダー人材の育成に繋がるものと考えます。私は2006年以降、先輩の数講座を除いてほぼすべての医学系講座の教授選考を目にしてきました。新任教授は異口同音に、連携をと発言されました。私から、改めてそれを各教授に問いかけたいと思います。

十全同窓会は新卒者入会の著しい低下、会員会費納入悪化に陥っています。北陸に残って活躍する新卒医師減少から、地域医療を支えることが危うくなることが懸念されています。ほとんどの医学類生たちの目は、医王保護者の会ひいては国試合格を経て専門医習得にのみ向けられ、同窓会や研究科の存在などには向けられません。研究科のこと、同窓会のこと、医学類のこと、附属病院のこと、これらはすべて繋がっています。一枚岩となるために、皆さんと努力したいと思います。



杉山 和久 博士

(昭和59年卒業)

医学教育分野別評価を終了、 国際的に評価される 拠点形成を推進したい

この度、令和4年4月から2年間の任期で医学系長・医学類長に再任しました眼科教授の杉山和久でございます。令和2年から2年間務めました医学

金沢大学医学系長・医学類長に再任

系長・医学類長としての経験をもとに、医学系・医学類のさらなる発展を目指したいと思います。十全同窓会の諸先生に改めてご挨拶を申し上げます。

令和2年から4年の2年間に医学系・医学類にはさまざまな問題が起こり、その解決に向けて努力してまいりました。具体的には新型コロナウイルス感染症蔓延によるオンライン授業、オンライン実習など教育委員会・医学教育研究センターの先生方と取り組んできました。また、多くの先生方のご協力により、令和4年1月18日から21日まで、医学教育分野別評価(国際認証)の審査を無事終了しました。将来の医学系のあり方、将来像を見据えた基礎系講座の統合と再編、臨床系では内科・外科の臓器別再編がなされました。将来の教室の方向性を決める教授選考のあり方も教授会等で議論してきました。今後も引き続きより良い医学系の運営に邁進したいと思います。

本医学系は、世界に発信する高水準の研究を目指すしなければなりません。そのために、基礎研究のための環境整備、基礎と臨床の共同研究の推進

のために基礎系と臨床系の教室がさらに連携できる仕組みを作り、先進的な研究を推進するための具体的な戦略を医学系の先生方と協議し策定したいと思います。また、医学系は専門性の高い多領域から構成されています。この専門性と多様性を生かして有機的な連携を深め、領域横断的な研究、多分野融合の研究をより一層の展開することにより、国際的に評価される拠点形成を推進したいと思います。

北陸3県の地域医療を担う医師、そして日本、世界の研究の発展に寄与する人材を輩出することは、医学系の重要な使命だと思います。医学類教育では学生・教員双方にとってより良い教育カリキュラムに改善する努力をしたいと思います。教育環境の一層の整備と醸成を進めて、優れた人材の育成を目指したいと思います。

医学系は金沢大学の中心部局の一つとして、金沢大学が掲げる「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」に貢献する所存です。皆さまのご支援を賜りますよう、何とぞよろしくお願い申し上げます。

就任挨拶

**蒲田 敏文 博士**

(昭和58年卒業)

**新棟完成で手術室を増設し、
金大病院のさらなる発展へ**

令和4年4月1日より金沢大学附属病院長のIV期目(2年任期)を継続すること

金沢大学附属病院長に再任(IV期目)

になりました。病院長III期目の2年間はほとんど新型コロナウイルス感染症対応に追われていたような気がします。私が病院長になってからの6年間の歩みを簡単に振り返りたいと思います。病院長に就任した平成28年4月に外来駐車場整備事業が完成し、18年の歳月をかけた金大病院の再開発事業が完了しました。病院長になって取り組んだことは、任期付き医療系職員の常勤職員化、病院内(病棟・外来)のWi-Fi整備と院内会議のペーパーレス化(iPadでの運用)、入院患者さん用の図書室の開設と図書室を利用した土日の学童保育の開始、給食設備の全面更新、病棟のすべて患者用ベットを最新の高機能ベットに更新、ドクターヘリと防災ヘリの離着陸を可能にするヘリポートの整備、ロボット手術装置(ダ・ビンチ)

の更新、救急部強化とドクターカーの導入、内科・外科の再編、新中央診療棟の建設開始などです。2年後に新棟が完成すると手術室が現在の15室から20室に増加します。ハイブリット手術室、最新ロボット手術装置、術中3TMRI装置も導入予定です。金大病院がさらに発展するよう頑張っておりますので、十全同窓会の皆さまにはご支援よろしくお願ひ申し上げます。

お知らせ

**各支部における同窓生の学術的・医療的活動状況について、
寄稿をお待ちしております。**

〒921-8640 金沢市宝町13-1
金沢大学医学部十全同窓会 会報編集委員会
TEL. 076-265-2132
FAX. 076-234-4208
Email juzen@med.kanazawa-u.ac.jp



山本 博 博士

(昭和50年卒業)

2021年9月28日開催の公立小松大学学長選考会議で、学長再任が決定され、本年4月1日より2期目を務めるところとなりました。大学設置準備の頃から数えると、小松での勤務は6年目に入っています。この間、母校と同窓の諸兄姉からひとかたならぬご支援を賜りましたことに厚く御礼を申し上げます。とくに、本学が擁する3学部の一つ、保健医療学部の看護学科と臨床工学科の講義・実習・演習では、関連医療機関・保健施設・学校等に、また、ワクチン接種を含む学生・職員の健康管理では、産業医、学校医の先生方や小松市医師会所属の諸先生に、たいへんお世話になりました。

公立小松大学学長に再任

改めて感謝申し上げます。

2017年、金沢を離れ、小松に移った頃、恩師、岡本宏先生からは「無等等」(『般若心経』)の書、竹田亮祐先生からは「新しいワインを容れたwine skinを馬の背にし白山の旭日に向かう姿を表した」(『笠舞雑記(11)』2018年)画を頂戴しました。「無等等」は「比べるもの無き」の意、wine skinは*New wine is poured into fresh wine skins, and both will keep in good condition. (Matthews 9.17)*に拠ります。2枚の色紙とも書窓に飾らせていただいています。

2022年4月には大学院サステイナブルシステム科学研究科が開学され、また、医系、文系、理系の3つの学部と専攻の教育研究が行われる末広、中央、粟津の各キャンパスも2024年までに拡充される予定です。無等等の学術文化の中樞をめざし、そこに注ぎ込み、また、そこから発信されるfresh wineも尽きることのないよう、微力ですが、尽力して参る所存でございますので、ひきつづきのご支援ご協力をお願い申し上げます。

最後に、母校金沢大学と医学部十全同窓会の益々のご発展と同窓の諸兄姉のご健勝、弥栄と益々のご活躍をお祈り申し上げます。



就任挨拶



杉本 直俊 博士

(平成3年卒業)

ジェネラルな メディカルスタッフの 育成を目指す

この度、令和4年4月1日付をもちまして、金沢大学医薬保健研究域保健学系

金沢大学医薬保健研究域保健学系教授に就任

教授に就任いたしました。謹んでご挨拶申し上げます。

私は昭和60年に金沢大学医学部に入学し、6年後の平成3年に卒業しました。入学当時の教養部はまだ金沢城跡にあり、1、2年次は毎朝、石川門をくぐり、三の丸から新丸へ続く坂を下りての通学でした(現在は坂の手前に河北門があります)。3年次からは宝町の医学部旧校舎、附属病院旧棟・講義棟で、講義・実習の毎日。今では取り壊されて面影もありませんが、地階にあった臨床講義棟(現在の医学類C棟の辺り)で聴講した臨床講義が懐かしいです。

医学部卒業後、金沢大学大学院医学研究科に進学し、故谷口昂名誉教授(小児科学)、永坂鉄夫名誉教授(生理学)のご指導の下学位を取得しました。その後、金沢大学医学部に就職し、講義や実習、

そして紫藤治島根大学医学部教授(生理学、当時は金沢大学医学部助教授)のもと、研究の日々を送りました。平成8年からは米国オレゴン州ポートランドにあるLEGACY EMANUEL MEDICAL CENTERへ留学しました。留学中に小泉晶一名誉教授(小児科学)、谷内江昭宏特任教授(小児科学)、和田泰三教授(小児科学)のご訪問をいただき、励ましに感謝しました。帰国後は、それまでの研究に加え、中村裕之教授(公衆衛生学)、土屋弘行教授(整形外科学)のご指導の下、新しい研究分野に挑戦しました。

今後は、医学部(医学系)で養った基礎から臨床までのスキルを活かして、ジェネラルなメディカルスタッフの育成に努めてまいります。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



村田 英俊 博士

(平成7年卒業)

圧倒的に強い臨床基盤を築き、 人を育てる

金沢大学および十全同窓会員の皆さま、大変ご無沙汰しております。平成7年本

聖マリアンナ医科大学脳神経外科学主任教授に就任

学卒の村田英俊と申します。このたび、令和4年1日付で、聖マリアンナ医科大学脳神経外科学主任教授を拝命いたしました。

私は平成7年本学医学部卒業後、横浜市立大学臨床研修医となり、その後脳神経外科に入局しました。同時に大学院へと進学し、von Hippel-Lindau遺伝子に着目した中枢神経再生研究を行いました。大学院在学中には、米国 ダートマス・ヒッチコックメディカルセンター(脳血管外科RE Harbaugh教授)に研修に行かせていただきました。学位取得後、横浜市大関連施設にて脳血管外科を中心に臨床経験を積み、平成16年~18年において獨協医科大学にて脊髄外科および脳血管外科フェローとしてさらに臨床の研鑽を重ねました。その後、横浜市大に

帰局し、平成20年より故川原信隆教授の指導の下、頭蓋底外科も手がけるようになりました。

近年、細分化されつつある脳神経外科領域にあって、大学所属の者としては珍しく、脳血管外科、脊髄外科、脳腫瘍外科(頭蓋底外科)を3本柱として臨床基盤を充実させていきました。

多くの医療機関が群雄割拠する首都圏において、強い臨床基盤を確立することは、患者さんにとって有益であるだけでなく、医師の人材確保、人材育成にとっても大きな役割を果たします。圧倒的に強い臨床の充実を目標に、明るく、健康的な教室創りを目指してまいります。

金沢大学および十全同窓会の先生方には、引き続き温かなご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



田村 昌也 博士

(平成8年卒業)

手術にアカデミズムを調和させ、 呼吸器外科学の発展に貢献

令和4年1月1日付で、高知大学呼吸器外科講座の教授を拝命いたしました。ここに謹んでご挨拶申し上げます。

高知大学医学部呼吸器外科教授に就任

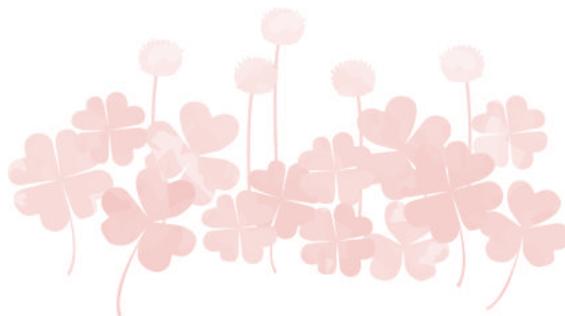
私は平成8年に本学を卒業し、渡邊洋宇教授の主宰する旧第一外科に入局しました。関連病院での外科修練を得て帰局後、学位を取得しました。金沢大学呼吸器外科では、低侵襲手術、拡大手術とバランスよく経験させていただきました。平成19年にはウィーン大学に留学し、肺移植、拡大手術、悪性胸膜中皮腫に対する新たな治療法の開発プロジェクトに従事しました。

研究における一つの軸は低侵襲呼吸器外科学です。低侵襲検査については、末梢血を用いた肺がんリンパ節転移診断法の確立、新規診断ツールである低線量X線動画像を用いた新たな検査法の臨床応用について取り組んでまいりました。また低侵襲手術については新たな機器の開発や臨床研究を行い、平均CT値という新たな概念から縮小手術適用のための

エビデンス構築を目指してきました。もう一つの軸は基礎医学から臨床医学への応用です。難治性がんである悪性胸膜中皮腫に対して、新たな治療法の開発に取り組んでまいりました。

今後はこれまでの経験を生かして手術にアカデミズムをバランスよく調和させ、自分自身も精進するとともに、若い外科医の育成にも取り組んでいく所存です。また高知大学の学生にも呼吸器外科の魅力を上手く伝えられるように注力していきたいと思います。気持ちを新たに呼吸器外科学および高知大学の発展に貢献していきたいと考えています。

人の和を大切に良好なチームを形成し、診療・研究・教育に一層精進していく所存ですので、金沢大学十全同窓会の皆さまにはご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



退職のご挨拶



医薬保健研究域医学系
消化器内科学

金子 周一

私は1982年に金沢大学医学部を卒業し、故小林健一教授の後任として2004年に旧内科学第一の教授に就任致しました。十全同窓会会員の皆さまには長きにわたって、色々のご指導、ご支援を賜りました。

学生時代に第15代教授であった故武内重五郎教授が記された“内科診断学”に感動し、故服部信教授が主宰しておられた第一内科の門を叩きました。“病気を診ずして病人を診よ”を行うためには“全身を診ると同時に専門性を持つことが大切”であると教えられて育ちました。同窓の先生方が地域医療で活躍しておられる姿を拝見し、社会における内科医の役割を考えました。そして、教授に就任した時の教室理念を“良い内科医を育成し、患者を救うことによって社会に貢献する”としました。この間、197名の入局者を迎えることができました。教室の医師が理念を理解し、社会で活躍してくれることが、教育者として過ごした私の大きな喜びとなりました。また、教室から13名の教授が誕生し、同じように教育してくれる様子を見ると、いつも後輩に感謝しています。

専門は消化器・肝臓病学を選びました。故服部教授に与えられた肝がんの研究が生涯の課題となりました。1987年から米国国立衛生研究所(NIH)と1993年から南カリフォルニア大学で4年間の学ぶ機会を得ました。実に優れた多くの後輩に恵まれ、133名の博士が誕生し、534編の英文論文を発表することができました。消化器病学会や肝臓病学会の最高賞、3つの大臣賞、加えて北國文化賞、金沢市文化賞などを授与していただいたことは励みになりました。また、WHOが指定する肝炎と肝がんの協力センターに金

沢大学が世界ではじめて指定を受けたことは大きな誇りになりました。

私は令和元年に初代の消化器内科の教授となり、金沢大学の内科は臓器別内科からなる“ひとつの内科”となりました。また、運営面では医学部長、系長、研究科長、域長を務めさせていただき、後期試験の廃止、地域枠の導入、医学専攻の設置など、皆さまのご協力を得て微力ながら尽力させていただきました。

こうして振り返りますと、若い時からあらゆる場面で十全同窓会の先生方に助けていただき、色々な機会をいただけなかったら、こうした人生はなかったことがよくわかります。この素晴らしい十全同窓会の益々のご発展と会員の皆さまのご健勝とご活躍を心より祈念申し上げます。誠にありがとうございました。



退職記念講演会

日時/令和4年3月19日(土)

場所/十全講堂

金子周一教授の退職記念講演会講演が、令和4年3月19日(土曜日)15時30分より十全講堂にて開催されました。コロナ感染症の対策を十分にとった上の開催で、オンライン配信も含めると、非常に多くの先生方に参加していただきました。この場を借りて御礼申し上げます。



金子先生は昭和57年3月に金沢大学医学部を卒業されました。卒業後、服部信教授が主宰する金沢大学第一内科学教室に入局され、内科学全般と消化器内科の臨床研鑽を積むと共に、大学院医学研究科博士課程で学位を取得されました。昭和62年より3年間、米国国立衛生研究所のRobert Purcell博士のもとで研究生活を送られました。帰国後は、金沢大学第一内科の助手に着任され、その後同科の講師を経て、平成5年より再度、米国南カリフォルニア大学のFrench Anderson博士のもとで研究活動を送られました。その後、平成8年より金沢

大学第一内科助教授、平成16年に小林健一教授の後任として第一内科の教授に就任されました。

金子教授は、総合的な内科医の素養を基盤に、各専門分野を深めた臨床内科医の育成と、臨床に基盤をおいたオリジナリティの高い研究を推進する第一内科の伝統を受け継ぎ、金沢大学を肝疾患の臨床・研究における我が国の中心施設へと発展させました。消化器疾患の遺伝子およびタンパク発現の包括的解析、生活習慣病におけるヘパトカインの発見と機能解析、消化器がんに対する抗腫瘍免疫解析と新規治療法の推進、肝がん・膵がんの早期検出にむけた新規マーカーの発見や測定系の確立、幹細胞を用いた再生治療法の開発など、この領域における国際的なリーダーとして活躍されてきました。その功績が評価され、平成17年には日本肝臓学会の最高賞である織田賞、令和3年には日本消化器病学会の最高賞である学術賞を受賞されています。経済産業大臣賞と2度の文部科学大臣賞に加え、平成21年に北國文化賞、平成27年に金沢市文化賞も受賞されています。



教育面においては、内科学第一、のちに消化器内科学の教授として、消化器内科をはじめとする内科の系統講義、臨床講義、ベッドサイド実習などを担当されました。197人が入局し、大学院教育では計133人の大学院生の研究を指導し、学位取得に貢献されました。

管理運営面では医学類長、医薬保健学域長・医薬保健研究域長などを務められ、医薬保健学域、附属病院の運営に尽力されました。またウイルス肝炎撲滅に向けた国際保健活動が認められ、2017年に指定された「世界保健機関(WHO)慢性肝炎肝癌協力センター」のセンター長も務められました。

退職記念講演会では「退任によせて」と題して、ご自分の歩んでこられた上述の研究の道のりをレビューされ、ノーベル賞を目指して努力された姿に感銘を受けました。また、今後は寄附講座で、新たな研究を展開されるそうです。金子先生のさらなる研究の発展を祈念したいと思います。また、長年にわたり我々後輩をご指導いただき、ありがとうございました。

(杉山 和久：記)



中西功夫名誉教授を偲んで

前分子細胞病理学教授 大井 章史

「教育・研究の病理学と、医療検証・診断学としての病理学の調和」を掲げる

中西功夫先生は、令和4年3月16日、肺がんの為84歳で逝去されました。先生は、秋田県鹿角郡小坂町のお生まれで、秋田高校をご卒業の後、金沢大学医学部に入学になり、さらに医学研究科病理学第一講座に進学されました。大学院卒業後、昭和47年、第一病理学教室助手、同48年講師、同51年金沢大学附属病院中央検査部助教授、同51年第一病理学教室助教授、そして昭和58年から平成13年まで、教授として教室の運営と学生、大学院生の教育に従事されました。この間、平成6年に、金沢大学評議員、平成8年から10年まで医学部長を務められ、大学の運営にもご尽力されています。

先生は、昭和45年から46年にかけて米国コーネル大学ニューヨーク病院研究員を、引き続き48年から50年には、ニューヨーク市モンテフィオレ病院でレジデントをされ、脳腫瘍の病理の権威Zimmerman教授、細胞診の先駆者Koss教授、中枢神経病理で有名な平野朝雄教授などの薫陶を受けられました。後にKoss教授は「イザオは膀胱がんの切片が一番たくさん作った男だ」と懐かしそうに思い出しておられました。中西先生は、米国の医師免許を取得されており、先生の米国留学は単に、視察や研究偏重なものでは無く、特に後半は米国のレジデントに交じっての、外科病理診断修練を主体としたものであったようです。この為、帰国後の我々の受けた教育も、この時の先生のご経験に基づいたものであり、当時はあまり気づきませんでしたが、今になって思うと、我々は当時の先端の米国の病理医研修を日本に居ながらにして体得させていただいたこととなります。

先生は常々「教育・研究の病理学と、医療検証・診断学としての病理学の調和」を目標に掲げられていました。すなわち「研究も診断も大事」と我々は理解しておりました。留学中に、米国における病院病理・外科病理の隆盛を目の当たりにされ、20年先の日本の病理学界の様子をすでに予想されていたと思います。果せるかな、昭和60年代ころから、北陸地方の中小の病院でも外科病理部門を新設したいという相談があり、次々とこれに応じておられました。一時は、東は魚津、西は舞鶴、北は七尾から南は城端までの関連病院に教室員を出張させ、外科病理診断、剖検を担当されました。長野市や遠く山形県、酒田市の病院の手術材料が送られてきていたことも覚えています。昭和64年には、医療における人体病理学の重要性に鑑み、北陸病理集談会を立ち上げ代表幹事として地域医療に貢献されました。

この頃、大学院生、教室員の数も増え続け、教室の歴史の中で、後にも先にもない隆盛期であったと思います。教室員は仲がよく、業務以外の活動も活発でした。先生はスキーの名手で、学生時代には西日本医学部学生体育大会で、アルペンとノルディックの2冠王になられたそうですが、この頃は、テニスのほか、野球にも熱心で、教室で野球チームを結成し、富山医科薬科大学の病理学教室との交歓試合も催しておられます。

研究面では、前任の梶川欽一郎教授の結合組織の形態学的研究を発展させるとともに、生化学、細胞生物学的手法を導入して研究を進め、特に型別コラーゲンの役割、結合組織と上皮細胞の接着、結合組織の崩壊に働く分解酵素などの課題に取り組みされました。日本結合組織学会理事を務められ、平成8年には、第28回日本結合組織学会学術学会を会頭として、金沢で開催されています。教室員には「自立した研究者たれ」という方針で臨まれ、海外留学を奨励されました。先生



中西功夫名誉教授遺影

の在任期間中、多くの教室員が海外留学をさせていただきましたが、留学先が、米国、ドイツ、フランス、スウェーデンと世界中の大学、研究所に散らばっていることをみても、先生が一人ひとりの個性をいかに尊重されたかがわかるような気がします。また先生は、研究者に、研究を論文にまとめることの重要性を強調されておられました。おかげで門下からは、金沢大学をはじめ、金沢医大、県立看護大、慶応大学、信州大学、大阪医大、愛知医大、山梨医大の教授として11名が育っていきました。

先生は、医学部長の際に創設された大学院独立専攻が発展改組され、大学院部局化に移行されるのを区切りに、平成13年、定年まで1年を残して退職されました。以後、重責から解放されたご様子で、年に数度お会いした折には、白神山へ旅行された話をされたり、最近では、奥様、お嬢様と一緒にニューヨークに行かれ、何十年ぶりにKoss教授とお会いになり、歓待されたことを楽しそうに語っておられました。令和2年にいただいた年賀状で進行肺がんが見つかったという報に接し驚愕いたしました。その後、薬石効なく、今日の日をむかえました。中西功夫先生のご指導に心より感謝し、ご冥福をお祈りいたします。

金沢から世界へ発信

本学耳鼻咽喉科・ 頭頸部外科の 臨床、研究の成果

金沢大学医学系
耳鼻咽喉科頭頸部外科
吉崎 智一
(昭和61卒業)

学会名称の変更

2021年、日本耳鼻咽喉科学会から日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会へ学会名称が変更となりました。金沢大学を含め多くの大学では頭頸部外科は独立した講座ではありません。耳鼻咽喉科医のうち頭頸部外科を専門とする医師が多いか少ないかで、耳鼻咽喉科学講座の名称を使うか、耳鼻咽喉科頭頸部外科の名称を使うかがわかれている状態でした。まだ知名度が低い頭頸部外科ですが、学会の正式名称の改名により日本のほとんどの講座が耳鼻咽喉科頭頸部外科学講座へと名称の変更が進むものと思われます。金沢大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科では現存スタッフの75%が頭頸部外科に関する、臨床、研究、教育に軸足を置いて活動しています。以下に現在、成果を世界に発信しているテーマについて述べさせていただきます。

耳科から側頭骨外科へ

伝音難聴に対する鼓室形成術はもちろん、感音難聴に対する人工内耳挿入術もスタンダードとなりました。この領域の進行扁平上皮がんに対しては側頭骨垂全摘術が標準治療でしたが、これでは顔面神経が犠牲になります。超選択的動注化学療法と放射線の同時併用により、顔面神経を温存して、従来と同等もしくはそれ以上の治療成績を上げることができるようになりました。また、近年増加している好酸球性中耳炎では進行して聾となることがあります。このようなケースに対して側頭骨病変の徹底除去+人工内耳挿入術を開発しました。長期成績も良好で世界的に注目されています。

鼻科から顎顔面外科へ

かつては前頭開頭併用で摘出していた前頭蓋底病変を経鼻内視鏡的に切除することが可能となりました。研究面では、本学リウマチ・膠原病内科が日本でも中心的な役割を果たしているIgG4関連疾患において、頭頸部領域の病変としては唾液腺腫脹が有名です。当教室ではIgG4関連疾患患者において嗅覚が低下していることを発見し、同内科とモデルマウスを用いた研究を行ってきました。その結果、IgG4関連疾患モデルマウスではやはり嗅覚が低下すること、その障害部位は中枢でなく嗅上皮の萎縮によることを明らかにしました。現在はIgG4関連疾患の治療、すなわち副腎皮質ステロイドが嗅覚障害に対しても有効であるか研究中です。

口腔咽喉・甲状腺手術から 頭頸部外科へ

咽頭上皮におけるウイルス発がん機構、具体的にはEpstein-Barr ウイルスによる上咽頭がん、ヒトパピローマウイルスによる中咽頭がんの解明と治療戦略の開発は当教室の最重点課題です。上咽頭がん、中咽頭がんともにウイルス関連がんとウイルス非関連がん、すなわち、飲酒喫煙関連がんに大別されます。一般に

ウイルス関連がんの方が高転移性ですが、化学放射線高感受性で予後が良く、そのため飲酒喫煙がんとは異なった治療法の開発が求められています。当教室では、上咽頭がんに対して化学療法のインターバルを利用して放射線を照射する交替療法が多施設共同前向き第二相試験の中心的役割を担いました。それまで世界標準とされていたレジメと比較して、治療成績は同等で有害事象は軽減され完遂率も高い治療法として確立することができました。ヒトパピローマウイルス関連中咽頭がんは全体として予後良好ですが、それ以外の予後に関するバイオマーカーとしてエストロゲン受容体の発現が予後良好のマーカーとして有用であることを解明しました。

また、口腔がんセンチネル生検の有効性についても多施設共同前向き第三相試験で一律にリンパ節郭清を施行する群と比較して病変制御率は同等で有害事象が軽減されることを明らかにしました。

以上、金沢大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科が世界に発信している成果について紹介させていただきました。さらにバージョンアップした成果を発信し続けていけるように教室員一同進み続けたいと思います。これからも同窓会の皆様のご支援、どうぞよろしくお願い申し上げます。



受賞

第1回杉田賞受賞

中田 光俊

(平成6年卒業)

金沢大学医薬保健研究域医学系
脳・脊髄機能制御学(脳神経外科学)

この度、第1回杉田賞を受賞いたしましたので、謹んでご報告申し上げます。本賞は脳動脈瘤手術の際に使用する杉田クリップの開発で世界的にご高名な故杉田虔一郎信州大学初代教授(1978-1988)・名古屋大学教授(1988-1994没)のイノベティブな業績を讃えるとともに、脳神経外科医療に関する研究・開発事業を促進させるため、NPO法人脳神経外科手術機器センターにおいて創設された賞です。脳神経外科領域で、イノベティブでかつ著明な業績を挙げた者に授与されます。今回、「高次脳機能温存型覚醒下手術の確立」の功績により受賞の栄誉に至りました。

当教室では、15年前に覚醒下手術を開始し、精力的に本手術法に基づく脳科学研究と新たな手術法の開発に取り組んできました。覚醒下手術は覚醒下に脳を直接電気刺激し、脳機能を確認しながら行う手術で、運動や言語機能を温存する手術として確立されています。ただ、実際には脳腫瘍の手術後には視空間認知、作業記憶、社会的認知、注意など高次脳機能の障害により生活の質を落とす方が多くいらっしゃいます。そこで、当教室では脳のどの部分が高次脳機能に関連するかを明らかにした上で、これを覚醒下にモニタリングすることで術後の生活の質を維持する手術法を確立いたしました。

覚醒下手術は、脳神経外科医、麻酔科医、リハビリ、検査技師、看護師など多職種で構成されるチームで行う手術です。今回の受賞にあたり、手術チームおよびこの手術コンセプトを支えた教室スタッフ、さらには多大なご支援を賜りました共同研究者の先生方に心よりお礼申し上げます。また、この手術は患者さんの協

力があって、はじめて成立する治療です。これまでに覚醒下手術を受けられた患者さんにも感謝したいと思います。

今回の受賞を励みに、今後も脳神経外科医療のさらなる発展のために精進してまいります。最後に、十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻のほど、何とぞよろしくお願い申し上げます。



令和3年度

日本認知症学会学会賞受賞

濱口 毅

(平成10年卒業)

金沢大学附属病院脳神経内科
(現金沢医科大学臨床教授)

この度、2021(令和3)年度日本認知症学会学会賞を受賞させていただきました。日本認知症学会は、認知症に関連する臨床および基礎の科学的研究の進歩発展をはかり、その成果を社会に還元することを目的として、1982年に設立されました。優れた研究を褒賞するために2011年より学会賞が制定され、毎年選考が行われています。

今回、私は「プリオン病の臨床診断、病態解明に関する研究」について学会賞(臨床分野)を受賞しました。プリオン病は、脳病理における海綿状変化と異常プリオン蛋白質の脳への沈着を特徴とし、認知症を中心にさまざまな神経症候を呈して急速に進行し、多くは6ヶ月以内に死亡してしまう疾患で、同種間あるいは異種間で伝播する感染症の側面を持ちます。私は、大学院生の時からプリオン病サーベイランス委員会という日本全国のプリオン病症例を全例登録することを目標とした疫学研究に参加しており、これまでに非典型例や医療行為によって伝播した医原性症例の臨床像や新しい臨床診断法について多くの報告を行ってまいりました。また最近では、医原性プリオン病からヒントを得て、Alzheimer病の病理学的な特徴の一つであるアミロイドβ蛋白質(Aβ)沈着もプリオン病と同様に個体間伝播する可能性を報告してきました。これらの研究成果が評価され今回の受賞となりました。

受賞にあたり、プリオン病サーベイランス委員会で一緒に研究を行ってくださっている共同研究者の先生方、金沢大学脳神経内科の先生方に深謝申し上げます。今後も認知症の研究を進めてまいりたいと思います。今後ともご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

第40回日本認知症学会 奨励賞受賞

篠原もえ子

(平成12年卒業)

金沢大学附属病院

脳神経内科

この度、2021年(第40回)日本認知症学会学術集会において「糖尿病とアルツハイマー病罹患との関連：JPSC-AD研究」という演題で奨励賞(臨床部門)を受賞いたしましたので謹んで報告申し上げます。

金沢大学脳神経内科では2006年から七尾市中島町での認知症の早期発見・予防を目的とする「なかじまプロジェクト」研究に取り組んでまいりました。そして、2016年からは「健康長寿社会の実現を目指した大規模認知症コホート研究(JPSC-AD)」に参画しています。本研究はJPSC-AD研究で得られた全国10,214名の高齢者のデータを解析したものです。

糖尿病は認知症のリスクですが、その原因の詳細は十分明らかになっていません。本研究では、ヘモグロビンA1c(HbA1c)値とアルツハイマー病との関連を解析し、HbA1c 5.7~6.4%の境界型糖代謝異常は、正常型(HbA1c 5.7%未満)と比べて、アルツハイマー病罹患のリスクが1.30倍(オッズ比)に増加することを初めて明らかにしました。JPSC-AD研究では2021年から2023年に同対象者について包括的認知症スクリーニング調査を実施する予定です。本調査によって縦断研究が可能となり、糖代謝異常と認知機能低下及び認知症発症との関連についてより詳細を明らかにでき、糖尿病が認知症をきたすメカニズム解明の一助となることが期待されます。

今回の受賞にあたり、ご指導いただきました脳神経内科教授の小野賢二郎先生をはじめ教室の先生方に深謝いたします。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

北陸心理学会功労賞受賞

松井 三枝

(特別会員)

金沢大学国際基幹教育院

金沢大学大学院医薬保健学総合研究科

臨床認知科学

令和3年12月18日に開催された北陸心理学会第56回大会時に当該学会功労賞を受賞させていただきました。北陸心理学会は心理学の研究と普及をはかることを目的として1966年に設立されました。現在では、福井、石川、富山の3県を中心に、大学、病院や施設、行政、教育等の場で心理学に関わっている会員(現在の会員数は約150名)によって構成されています。平成28年には日本学術会議の協力学術研究団体に指定されています。毎年、学術大会が開催されるほか、10年前から、学会誌「心理学の諸領域」が刊行されました。私は、2010年よりこの学会の理事として、北陸における心理学の発展と活性化を願いつつ、さまざまな学会活動を行ってきました。とくに、学会誌「心理学の諸領域」の創刊時より副編集長として、さらに、6年前より編集長として、査読制度をとる学術誌のために、尽力してきました。この度は、これらの地道な活動への貢献を認めていただいたということでした。基礎研究から臨床研究まで、心理学の幅広い研究分野の研究が取り扱われ、特化した専門学会と異なり、編集長としては、多様な領域の研究を見渡し評価するという大変さがある一方、幅広い心理学の領域を知る機会になるという会としての良さがあると思います。私自身は医療分野における臨床心理学・神経心理学を専門としておりますが、心理学の国家資格の制度がようやく樹立し、平成31年より公認心理師が誕生していることもあり、そのための心理学の専門教育および心理学の発展へいつも尽力したいと思っています。医学・医療への心理学の関与はさまざまな分野であるように思いますので、今後ともよろしく願い申し上げます。

令和3年度 金沢大学学長賞受賞

山村 雄太

(平成22年卒業)

金沢大学附属病院腎臓内科

この度、令和3年度の金沢大学学長賞を受賞しましたことをご報告させていただきます。今回の受賞にあたりご指導いただいた和田隆志学長をはじめ、研究室および共同研究者の先生方に心より感謝申し上げます。

私の研究テーマは転写因子であるPAX2遺伝子に着目した研究でした。PAX2遺伝子は腎発生に必須の転写因子であり、ヒトにおいては遺伝性腎疾患である腎コロボーマ症候群の主要な原因遺伝子であることが知られています。一方で、PAX2遺伝子のヒト腎発生における役割は、倫理的問題もあり十分に検討されていませんでした。今回、PAX2遺伝子変異を有する腎コロボーマ症候群患者さんより疾患特異的iPS細胞を樹立し、腎発生過程を模倣する形でPAX2遺伝子変異がヒト腎発生過程に及ぼす影響を検討しました。その成果としてヒト腎発生過程でPAX2遺伝子によって制御される遺伝子群を同定しました。この知見は、原因遺伝子が未確定の遺伝性腎疾患をはじめ、PAX2が関連する病態の解明に有用な知見となることが期待されます。

今回の研究を通して国内外の各種学会で発表する機会を得ることができたとともに、京都大学iPS細胞研究所への国内留学をはじめ、数多くの共同研究者との繋がりを得ることができ、大変貴重な経験になったと感じています。

これらの研究成果の結果として、名誉ある学長賞を受賞させていただき、大変光栄に存じます。今回の研究活動で得ることができた経験を、今後の臨床および腎臓病研究へ生かすことで、少しでも腎臓病患者さんの診療へ還元することができればと考えています。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導の程、何卒よろしく願い申し上げます。

受賞

令和3年度
金沢大学学長賞受賞

米澤 則隆

(平成22年卒業)

横浜栄共済病院整形外科

この度、金沢大学学長賞を受賞致しましたので謹んでご報告申し上げます。今回の受賞にあたり、ご指導いただきました土屋弘行教授、出村諭准教授をはじめ、整形外科医局の先生方およびご指導いただきました共同研究者の先生方に心より感謝申し上げます。

私が所属する金沢大学整形外科脊椎班では富田勝郎名誉教授の時代より、世界に先駆けて腫瘍脊椎骨全摘術を中心に、これまでのデータが長年にわたって蓄積して、私たちはそれを使ってさまざまな知見を導き出し発見することができました。私の大学院期間中に行った研究も、先輩の先生方の過去の症例の積み重ねがあつてこそ成し得たものになります。私は、村上英樹先生(現：名古屋市立大学整形外科教授)が土屋弘行教授の開発した腫瘍骨を液体窒素処理し再建骨として再利用する液体窒素処理骨移植を応用された次世代腫瘍脊椎骨全摘術に関する臨床研究・基礎研究に従事し、学会活動・論文作成を行ってまいりました。次世代腫瘍脊椎骨全摘術により、これまで確認できなかったような手術後に遠隔巣が自然縮小する現象(Abscopal effect)を認める症例が散見されるようになり、世界に先駆けて報告をさせていただきました。また基礎実験にて、液体窒素処理骨移植のAbscopal effectを解明するといった金沢大学整形外科オリジナルの研究に携わることができました。非常に充実した大学院時代を過ごせたことを心より感謝申し上げます。これらの研究成果を評価いただき、名誉ある賞をいただきましたことを光栄に存じます。今後も脊椎疾患の治療の発展にむけて、努めてまいります。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

令和3年度
金沢大学学長賞受賞

上岡 顕

(平成25年卒業)

金沢医療センター整形外科

この度、学位取得および大学院博士課程修了に際しまして、土屋弘行教授ご推薦のもと金沢大学学長賞を受賞しましたことを謹んでご報告させていただきます。

この賞は、各博士課程の卒業生のなかから、英語論文数やインパクトファクター、学会賞などの業績を総合的に判断し、優秀な成果を上げた者が授与されるものです。私は大学院在籍中において、学位研究を含む6本の英語論文を発表したこと、そして科研費を取得できたことを評価いただき、受賞にいたしました。このような素晴らしい賞を受賞できて大変に喜ばしく思います。唯一、残念であったのは通常は華々しく卒業式のなかで授与いただくのですが、コロナ禍ということで、縮小開催された卒業式のなかでの授与となったことです。ただ、そんな経験もコロナ禍ならではのことと思えますし、貴重な経験であったと前向きに考えます。私がこのような賞を受賞できたのは、ひとえに金沢大学にある、貪欲に自己研鑽を積もうとする素晴らしい雰囲気の影響を受けたためです。多くの先輩方の背中に少しでも追いつきたい、追いつかなければいけないという思いから、自然と学位研究、臨床研究を遂行し、形にすることができました。今回の受賞にあたり、ご指導いただいた土屋教授をはじめ、加畑先生、教室の先生方に深く感謝申し上げます。

今後も大学院生活で学んだりサーチマインドをもって精進していきたいと思しますので、十全同窓会の先生方におかれましては、変わらぬご指導、ご鞭撻のほどを何とぞよろしくお願い申し上げます。

令和3年度
金沢大学学長賞受賞

荒木 麗博

(大学院)

金沢大学附属病院整形外科

この度、令和3年度金沢大学学位記・終了証書授与式において金沢大学学長賞を受賞いたしましたのでご報告いたします。

私の受賞理由は、学位論文で調査いたしました骨肉腫細胞由来エクソソーム内分子の一つであるmiR-146a-5pが骨微小環境において破骨細胞の融合を阻害しており、腫瘍細胞による血管新生の増加や遠隔転移の促進に関与し、患者予後を不良にしているという骨肉腫の進展の一因を見いだした研究成果に対してです。

骨肉腫は小児期からAYA世代にかけて好発する原発性悪性骨腫瘍で、上皮系腫瘍のがんと同様に、肺などへ遠隔転移をきたすことが生存に大きく影響することが知られています。遠隔転移のない骨肉腫患者の5年生存率が70-80%であるのに対して遠隔転移のある骨肉腫患者の5年生存率はわずか10-20%と非常に低いと報告されています。つまり、転移の予防が患者の長期生存につながるため、腫瘍が転移をきたす前の原発巣周囲の微小環境の変化の解明が生存率の改善に重要と考えられています。そこで私たちはエクソソームの研究を精力的に行っておられる免疫学教室と共同で、骨肉腫が転移をきたす前の骨微小環境の変化に影響を及ぼしているエクソソームを同定することを目的に研究を遂行いたしました。今後、この分子が予後マーカーや治療標的として臨床応用できるかについて研究を継続していきたいと考えております。

今回の受賞にあたり、ご指導いただきました整形外科教室の土屋弘行教授、免疫学教室の華山力成教授をはじめ、教室の先生方には改めてこの場を借りて感謝いたします。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

学会報告等

角膜カンファランス2022 (第46回日本角膜学会総会・第38回日本角膜移植学会)

日時/令和4年2月10日(木)~12日(土) 場所/石川県立音楽堂

令和4(2022)年2月10日~12日の3日間(オンデマンド配信:2022年3月1日~21日)、石川県立音楽堂にて日本角膜カンファランス2022(第46回日本角膜学会総会・第38回日本角膜移植学会)を開催いたしました。学会長として無事に終了することができ、十全同窓会の先生方への感謝の気持ちでいっぱいです。学会参加登録者も当初の見込みを大幅に超える1200人程度となり、また、例年よりも多くの演題(178演題)や角膜カンファランス史上最多である15の共催セミナーを開催することができました。

一般講演やポスターセッションでは新

しい知見が数多く発表され、活発な議論が行われました。シンポジウムは「角膜ジストロフィ研究と治療の最前線」と「Keratoplasty 2022」の二つが行われ、後者は全て英語で行われました。海外招待講演では8人の先生方をWeb上で呼びし、Zoom講演にて最新の研究成果や手術手技を披露していただきました。学会3日目は全ての講演を英語で行うEnglish sessionとしましたが、「国際学会の雰囲気や久々に感じることができた」との感想も寄せられ、嬉しく思っています。角膜学会の生みの親である眞鍋禮三大阪大学眼科名誉教授の追悼講演も

企画され、若き角膜研究者への熱いメッセージが届けられ、大きな反響を呼びました。学会後には、金沢市出身の黒瀬恵さんによるパイプオルガンコンサートや世良公則さんによるアコースティックライブコンサートが開催され、素晴らしいパフォーマンスを楽しんでいただきました。

最後になりますが、本学会の開催にあたり多くのご支援をいただき、誠にありがとうございました。

(金沢大学附属病院眼科

小林 顕:記)



十全学術行脚 第33回 | 福井大学 |



福井大学医学部(松岡)キャンパス

福井大学医学部は、昭和55年に前身の福井医科大学として開学いたしました。3年半後の昭和58年に医学部附属病院が開院、昭和61年に大学院の設置、平成6年に高エネルギー医学研究センター、平成21年にこどもの発達研究センターが開設されました。この間、平成9年から看護学科が併設されております。平成15年には福井大学と福井医科大学が統合されて、現在の福井大学医学部となりました。平成30年に附属病院の再開発が完了し、令和2年に医学部創立40周年を迎えました。

前回は2013年の第24回にご報告の機会をいただきましたが、この間に、松木孝澄教授(法医学・人類遺伝学)、石崎武志教授(基礎看護学 健康科学)、山口明夫教授(外科学(1))、寺澤秀一教授(地域医療推進講座)、馬場久敏教授(整形外科学)、和田有司教授(精神医学)、片山寛次教授(がん診療推進センター)、横山修教授(泌尿器科学)の8名の教授がご退職されました。令和4年4月現在、

福井大学医学部には教授2名、准教授3名、講師3名、助教1名、院生1名の十全同窓会関連の先生方が在籍しておりますので、8名の先生方から学術内容を中心にご紹介いただきました。

(中本 安成：記)

1. 此下 忠志 准教授

(昭和61年卒業)

内科学(3)分野



第2内科出身で竹田亮祐教授、馬淵宏教授、東福要平教授等から薫陶を受けました。平成12年から宮森勇教授ご主宰の福井医科大学第3内科に赴任、改組を経て現職です。これまでレニン-アンジオテンシン-アルドステロン系の研究に従事し、転写、発現、遺伝子多型、網羅的解析による新規マーカー開発等の成

果をあげています。多施設共同遺伝子コホートG-DOC Study Investigators (UMIN-CTR第1,580号)を主宰し、大型プロジェクトや国際共同研究に参画しています。成果は国内外の学会で高い評価を得ています。最近では、光栄なことに竹田亮祐先生が御年93才にしてご執筆された英文論文“Pregnancy-associated diabetes insipidus in Japan - a review based on quoting from the literatures reported during the period from 1982 to 2019. Endocr J 68: 375-385, 2021. Takeda R, Demura M, Sugimura Y, Miyamori I, Konoshita T, Yamamoto H”のお手伝いをさせていただきました。また東福要平先生がかつて設立にかかわった日本痛風・尿酸核酸学会で令和2年度最優秀論文賞、令和3年度優秀論文賞を受賞しております。

2. 中本 安成 教授

(平成元年卒業)

内科学(2)分野



第1内科の出身で金子周一教授のもとで消化器内科学、特に肝がんの分子免疫病態学研究と治療法の開発

に取り組み、講師を経て、平成23年1月より現職に着任し13年度目に入りました。附属病院における副病院長(研究担当)を併任しています。教室には消化器内科とともに脳神経内科の専門グループがありますが、これまで教室員、OBによる同窓会が存在せず、2013年に新たに創設し10周年を迎えました。教室員は一丸となって、医師の総合力によって健康に貢献する、をテーマに診療、研究、教育に励んでいます。研究面では、B型肝炎ウイルスの鋳型であるcccDNAに対する分子免疫治療の開発をAMED研究班長として二期担当しています。さらに、がん細胞の進化を司るドライバー遺伝子に関する基盤研究や人工知能(AI)技術の臨床開発も進めています。また日本内科学会(理事)、日本消化器病学会(理事)、日本肝臓学会(理事)においても活動しています。

3. 廣野 靖夫 准教授

(平成2年卒業)

がん診療推進センター



卒業後、金沢大学旧第2外科学講座に入局し、平成12年に福井医科大学第1外科学助手として赴任し、

山口明夫教授から薫陶を受け、講師を経て、平成31年4月にがん診療推進センター長に就任しました。前任の片山寛次教授から引き継いだ緩和ケアチームやNSTチェアマンとして院内チーム医療の推進活動のほか、通院治療センター運営や化学療法レ

ジメン審査の統括、がんゲノム医療にも関わっております。また、北信がんプロの福井大コーディネーターとしてオンコロジーセミナー、県民公開講座等を開催してきました。さらに、福井県がん診療連携協議会研修部会長として福井県の緩和ケア研修やがん教育の普及に関わっています。消化器外科医として食道・胃がんの手術指導も行う傍ら、腹腔内化学療法などを加えた集学的治療によるがん腹膜播種の制御に関する研究を続けています。現在日本臨床栄養代謝学会の中部副支部長を務めており、令和4年8月に学術集会を開催します。

4. 長谷川 稔 教授

(平成3年卒業)

皮膚科学分野



私は福井県勝山市の出身ですが、おかげさまで2013年に福井大学に赴任させていただきました。当教室には、県内の

医療機関から、難しい皮膚疾患の症例が集まってきました。それに加え、皮膚病変を主訴に来院される膠原病の患者さんも診察しています。難病と言われる膠原病ですが、新薬の臨床試験を行う機会も増えており、新しい治療法の確立が期待されます。膠原病の診療にあたっては、全身や他臓器の病変が悪化して困ることがございますが、中本教授主宰の第2内科の先生方に助けていただくことも多く、とても感謝しております。なお、就任時より大変お世話になっていた泌尿器科の横山教授がこの度退職されます。先生の福井大学でのご功績は本当に素晴らしいものがあり、同門として誇らしく思います。近年偉大な先輩方がご退職される状況が続いており、新たに福井大学で仕事をさせていただける方を心よりお待ちしております。

5. 伊藤 秀明 准教授

(平成6年卒業)

泌尿器科学分野



卒業後に金沢大学泌尿器科に入局し、関連病院での研鑽と2年間の米国留学を経て2006年に十全同窓会の先輩である

横山修前教授を頼って福井大学に赴任いたしました。低侵襲手術の領域で多くのチャンスをいただき、2013年には福井大学でのロボット支援手術を責任者として立ち上げました。最近は執刀医としてよりも指導医として手術に参加することが圧倒的に多くなりましたが、まだまだ執刀医としても上手になりたいと思っています。研究ではがん治療におけるオートファジー誘導の意義やmicroRNA発現制御などをテーマとした尿路生殖器腫瘍に関する研究のほか、講座の柱である蓄尿・排尿機能障害の発生機序解明に関する研究の一端に関わってきました。それでは十全同窓会の先生方、新しいステージで。

6. 早稲田優子 講師

(平成11年卒業)

内科学(3)分野



金沢大学旧第3内科在籍中には中尾眞二教授、藤村政樹准教授、笠原寿郎准教授のもとで呼吸器内科学、

びまん性肺疾患を中心に研鑽を積んで参りました。2017年から福井大学医学系部門内科学(3)分野助教、2021年からは同講師を拝命し、臨床、教育、研究に従事しております。2019年冬には北陸三県で2番目にクライオバイオプシーを導入、もともと外科的肺生検でないと診断できなかったびまん性肺疾患の肺組織を内視鏡的に採取できるようになっただけでなく、画像や病

十全学術行脚

理をデジタル化しWeb会議システムにて全国の胸部専門の放射線科や病理の先生などとリアルタイムで検討を行い、診療につなげていくシステムを確立したことより、全国レベルの診断や治療を行うことができるようになりました。呼吸器内科医のみならず、他科の医師、臨床研修医、子育て中の医師なども参加し、全体としてびまん性肺疾患の診療レベルの向上に寄与し、県内外からもコンサルテーションを受けることも増えております。

7. 尾崎 公美 講師

(平成14年卒業)

放射線医学分野



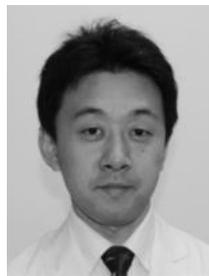
卒業後、金沢大学放射線医学教室へ入局し、松井修名誉教授のもとで肝硬変の形態変化に関する画像所見

の検討をさせていただき、同テーマで学位を取得しました。蒲田敏文教授の格別のお取り計らいによって2019年4月より福井大学の放射線科でお世話になっております。のんびりと和やかな雰囲気の中で、診療に携わらせていただいています。全ての診療科の先生方にお役に立てるような診断ができるよう尽力しています。

8. 川村 裕士 助教

(平成20年卒業)

産科婦人科学分野



平成20年に卒業後、石川県立中央病院で臨床研修を行ったのち、同病院産婦人科で朝本明弘先生、干場勉先生に師事し、

分娩管理や手術・外来診療などを中心に産婦人科の基礎を学びました。その後、周産期医学の研鑽のため、大阪府立母子保健総合医療センター(現大阪母子医療センター)にて、胎児治療やハイリスク妊産婦の管理を学び、多胎妊娠や胎児超音波診断に関する臨床研究に従事致しました。臨床研修でお世話になった先生とのご縁もあり、平成28年より福井大学産科婦人科学教室に所属し、現在は同教室の周産期部門を担当しております。母子保健は行政との関わりが多い分野の一つであり、県の健康調査事業や新型コロナ感染妊婦の入院コーディネートなどにも協力させていただいております。

9. 北崎 佑樹 医師

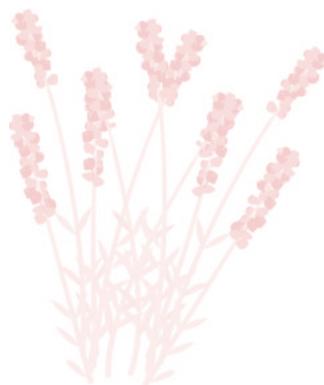
(平成24年卒業)

内科学(2)分野



卒業後、自分の出生地である福井県で医師として貢献したいと考え、平成24年4月より福井大学の臨床研修医として勤務を

致しました。臨床研修を修了した後、平成26年4月より福井大学内科学(2)分野(脳神経内科)に入局し、同教室の中本安成教授のご指導のもと臨床・研究の根幹となる考え方を学び、研鑽を積んでおります。臨床面では、日本神経学会の他に、日本脳卒中学会、日本認知症学会、日本てんかん学会、日本頭痛学会などに所属し、脳神経内科医として常に幅広い診療ができるように心がけております。研究面では、平成29年10月に大学院に入学し、Creutzfeldt-Jakob diseaseをはじめとした神経難病の病態解明に向けた研究を行っております。所属教室のテーマである、内科医としての総合力と高い専門性を両立すべく、日々精進するよう心がけております。



支部だより

愛知支部

去る令和3年12月11日に第35回支部総会が例年開催の名鉄グランドホテル18階の「涵梅舫」にてコロナ第5波、第6波の合間を縫って開催されました。このコロナ下でなかなか病院勤務の先生方の出席が多く望めず、尾山淳先生(昭和43年卒業)に始まり武田真輔先生(平成20年卒業)までの計16名の出席となりました。

総会は三河の副支部長の伊藤健一先生(昭和51年卒業)の司会で始まりました。この1年で逝去された三嶋勉先生(昭和39年卒業)に出席者全員で黙とうを捧げ

総会は進行していきました。会計報告は承認、支部長交代[水上から篠田雅幸先生(昭和51年卒業)に]承認、講演は蒲郡市民病院名誉院長で愛知県医師会地域医療政策研究機構委員会委員長の伊藤健一先生(昭和51年卒業)より「コロナ感染と地域医療構想」という演題でお話をいただきました。これからの医療の方向性を垣間見た気がいたしました。

記念写真撮影、乾杯[尾山淳先生(昭和43年卒業)の音頭]の後、歓談に移りました。

最後に武田真輔先生(平成20年卒業)の音頭でまた来年も参集することを誓い、万歳三唱で会はお開きとなり、三々五々諸先生方は夜の街(コロナ下ではありませんが)に消えていきました。

(水上 哲秀：記)

出席者(敬称略)

尾山淳(昭和43年卒業)、野垣英逸(昭和44年卒業)、吉尾豪(昭和45年卒業)、大原清仁(昭和46年卒業)、水上哲秀(昭和47年卒業)、伊藤健一(昭和51年卒業)、篠田雅幸(昭和51年卒業)、荒尾元博(昭和57年卒業)、長谷川光広(昭和58年卒業)、大原康壽(昭和60年卒業)、近藤圭太(昭和63年卒業)、宇野雄祐(平成3年卒業)、高見昭良(平成3年卒業)、村上英樹(平成5年卒業)、西脇太記朗(平成7年卒業)、武田真輔(平成20年卒業)



病院紹介

公立能登総合病院

当院の歩み

昭和18年に開設された「医療利用組合連合会能登病院」を起源とします。以後幾度かの変遷を経て昭和40年に現在の「公立能登総合病院」となりました。七尾市街を見下ろす高台に位置し、敷地には本館、精神センター、訪問看護ステーション、ヘリポート、看護学校などがあります。平成30年4月には、敷地内薬局(全国で3番目)と能登地区で唯一のタリーズコーヒーが入った「Blue Sky Town」がオープンしました。

診療

当院は石川県内に2カ所ある救命救急センターの1つを有する三次救急病院です。ドクターヘリ搬送約50件を含む、年間2,100件を超える救急搬送があり、軽症から重症まで幅広く診療しています。能登全域から脳血管疾患や外傷、心血管疾患などの症例が搬送されています。脳梗塞に対する血管内治療や心血管疾患などは、当院が能登半島全体の治療の中核を担っています。石川県では平成30年9月にドクターヘリが運航開始され、特に能登北部から救急車で90分以上かかっていた搬送時間が4分の1に短縮され恩恵を受けています。また平成29年

10月には手術用ロボット「ダ・ヴィンチ」が導入され、泌尿器科の前立腺手術などで活用しています。これら質の高い医療を効率的に提供しながら、在宅診療、精神科デイケア、訪問看護ステーションなども含めた幅広い診療を行い、急性期から慢性期に至るまで、医療・福祉・介護を連携させた地域完結型の地域包括ケアシステムを目指しています。

臨床研修

厚生労働省より指定された基幹型臨床研修病院として、人材育成に努めています。昨今は新型コロナウイルスの流行もあり、マッチングでは苦戦を強いられていますが、令和4年度は3年ぶりに基幹型研修医が来てくれることになりました。また、金沢大学と金沢医科大学から「たすき掛け」の研修医を受け入れ、指導にあたっています。「2025年問題」「2040年問題」に代表される少子高齢化社会ですが、能登地区はすでに高齢化率が40%を超えています。今後の医療を見据え、未来の診療に20年早く触れてもらっていると考えています。その中でも医学的に示唆に富む、大変興味深い症例を経験することがあり、学会発表や症例報告などを積極的に行うようにしており

ます。また当院では産婦人科や精神科を含め、現在の研修制度で必須の項目をすべてカバーできるのが大きなメリットです。診療科の垣根が低く、総合診療のできる人材育成を心がけています。特にここ最近では、当院を巣立った研修医のほとんどが、専門研修先として金沢大学など石川県の施設に進んでいるのが大きな特徴です。能登総合病院で研修した先生が活躍され、その中から将来的に能登の医療を支えてくれる人材も育ってくれればと願っています。

今後の展望

全23診療科の常勤医が57名(令和4年度)で日々の診療にあたっております。金沢大学からは常勤医や外来等の非常勤医の派遣をいただき、ありがたく思っております。特に令和2~3年度の2年間は、石川県地域枠の先生の派遣も得て、若い力で活気を与えていただきました。人事交流などを介して地域の中核病院としての役割を果たしていきたいと思っております。

今後も本同窓会のご理解とご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

(診療部長 山端 潤也：記)

概要

公立能登総合病院
所在地 石川県七尾市藤橋町ア部6番地4
病院長 上木 修
病床数 434床(一般病床330床、感染症病床4床、精神病床100床)
診療科数 23

沿革

昭和18年9月 七尾市藤橋町に医療利用組合連合会能登病院として開設
平成12年3月 七尾市藤橋町ア部6番地4に新病院開院
平成12年5月 救命救急センターの指定
平成16年3月 金沢大学医学部附属病院協力型臨床研修病院に指定
平成16年10月 管理型臨床研修病院に指定
平成29年10月 手術用ロボットダビンチ導入
平成30年10月 ドクターヘリに伴う患者搬送の開始
平成31年1月 日本医療機能評価機構認定病院を更新

独立行政法人国立病院機構 敦賀医療センター

当院の歩み

当院は、明治31年3月26日に敦賀聯隊区司令部敦賀衛成病院として創設され、昭和11年11月2日に敦賀陸軍病院と改称されました。戦後、昭和20年12月1日に厚生省に移管され国立敦賀病院となり、昭和26年4月1日に国立療養所敦賀病院と改称されました。

平成15年7月1日に厚生労働省の再編成計画に基づき、福井県三方郡(現三方上中郡)にあった国立療養所福井病院と統合し、「がん、呼吸器疾患、重症心身障害、血液・造血器疾患」の政策医療を柱とする医療機関として国立福井病院となりました。

平成16年には独立行政法人化され、平成27年4月1日に独立行政法人国立病院機構敦賀医療センターと改称致しました。

当院の現状

当院は福井県の重症心身障児の最大の診療拠点であるとともに、福井県嶺南地域唯一のがん診療連携拠点病院として活動してきており、消化器がんを中心と

したがん診療とともに緩和医療、がん患者相談、がん患者就労支援などの活動にも取り組んできました。敦賀市医師会、三方郡医師会、地域医療機関をはじめ、行政との意見交換、ご支援のもとで生活習慣病診療、整形外科疾患を含めた高齢者診療、小児医療を中心に、地域に根差した診療を継続しております。また、今般の新型コロナウイルス感染症診療にあたっては、地域の感染症指定病院とともに重点医療機関として入院診療を担当し、外来診療、PCR検査、ワクチン接種も行政の指示に則って担当しております。

敦賀市は古来より交通の要所として栄えた町で、都から北陸への玄関口としての町、あるいは都へと通じる港町から、明治時代以降は、欧州への路として大陸横断鉄道につながるロシアのウラジオストク港への海の玄関口として、東京(新橋)からの鉄道でも栄えた歴史があります。近代では若狭湾に原子力発電所が多数建設され重要な電源供給地域となっており、それらに関わる流入人口や、関西や中京地域からの主に週末の日帰り観光を中心とした観光需要もありますが、全国の地方都市同様に高齢化と人口減少が進んでいる地域です。北陸新幹線の敦賀

延伸で2024年に巨大な敦賀駅が運用開始され、戦前以来の東京からの直通列車の終点となりますが、人口動態と医療需要を見据えた地域医療構想が検討されています。

当院の展望

当院は医療資源を従来からの得意な診療に集中し、地域住民の方々への貢献を目指して努力しています。日進月歩の医療に対応し、近年では高齢者にも対応可能な低侵襲治療、薬物療法の比率が高まっています。また、今般のコロナ感染症も含め、可能な対応を行いながら地域に貢献し、この風光明媚で食べ物の美味しい地域を守っていく一翼になれるよう、地域の医療機関とともに努めております。現在、福井県は内科医師を中心に、また嶺南地域を中心に医師不足の状態で、当地で勤務されることは大歓迎です。勤務を検討される方がおられればぜひご相談いただけますようよろしくお願い致します。

今後とも十全同窓会の皆さまのご指導ご支援をいただけますよう何とぞよろしくお願い申し上げます。

(病院長 飯田 敦：記)

概要

独立行政法人国立病院機構 敦賀医療センター
所在地 福井県敦賀市桜ヶ丘町33-1
開設 1898年3月26日
病院長 飯田 敦
病床数 223床(重症心身障者病棟120床)
診療科数 29

沿革

明治31年3月26日 敦賀聯隊区司令部敦賀衛成病院として創設
昭和11年11月2日 敦賀陸軍病院に改称
昭和20年12月1日 厚生省に移管、国立敦賀病院に改称
昭和26年4月1日 国立療養所敦賀病院に改称
平成15年7月1日 国立療養所福井病院と統合し国立福井病院となる
平成16年4月1日 独立行政法人国立病院機構福井病院となる
平成27年4月1日 独立行政法人国立病院機構敦賀医療センターに改称

教室だより

子どものこころの発達研究センター

はじめに

当センターは、子どものこころと脳の発達およびその障がいが多面的に研究し、その成果を当事者と家族への支援に還元することを目指しています。組織は、基礎・橋渡し研究部門、臨床・社会実装研究部門、文理融合・地域支援部門の3部門で構成されています。同時に、大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学連合大学院小児発達学研究科金沢校として「こころの相互認知科学講座」を担当しており、博士課程(後期3年)の教育を担当しています。大学院プログラムは、5つの研究領域(社会認知生物学、協調運動障害学、高次脳機能学、社会神経科学およびコミュニケーション支援学)に分かれていて、高度な知識と技能を修得し、課題発見・解決能力を備えた専門家の養成に努めています。各部門・研究領域の連携だけではなく、医薬保健研究域、人間社会研究域をはじめとする多くの部局の先生方のご協力を賜りながら、生命科学から診断、治療、介入、療育支援にまたがる学際的研究を推進しております。

研究・教育

基礎・橋渡し研究部門(社会認知生物学領域・協調運動障害学領域)

子どもの脳とこころの発達のメカニズムを神経内分泌学的側面から研究しています。とくに、オキシトシンなどの神経内分泌物質を社会性行動障害の治療に応用する科学的根拠の解明と、自閉スペクトラム症(ASD)の診断・治療の指標となるバイオマーカーの探索に主眼を置いています。また、社会性行動改善薬の開発を目指し、オキシトシン誘導体を化学合成しASDモデル動物で非臨床試験を進めています。

臨床・社会実装研究部門(高次脳機能学領域・社会神経科学領域)

世界的にもユニークな幼児用脳磁計(MEG)を



用いて脳の発達過程を「見える化」し、言語・運動発達に関連する神経指標を明らかにしてきました。参加者は研究プログラム「バンピプラン」を通じて募集し、ASD児・定型発達児・低出生体重児の包括的評価を実施してきました。前述の幼児用MEGと成人用MEGを同期させたハイパースキャンニングMEGシステムも稼働しており、親子関係を特徴付ける神経指標の探索を進めています。最近では小型センサーによる睡眠評価にも取り組んでいます。

文理融合・地域支援部門(コミュニケーション支援学領域)

地域と連携し、子どものこころの諸問題への取り組みを討論し、科学的根拠のある支援プログラム、教材、教員研修プログラムの開発を目指しています。ASD児の語用能力やプロソディ理解について、コミュニケーションに関する質問紙・行動評価・MEGデータを収集・解析し、新しい語用論発達評価法を開発しています。また、吃音のある子どもへの支援法の開発も進め、地域研修や動画配信によって知見を広めています。

診療・支援・社会貢献

金沢大学附属病院子どものこころの診療科の診療・臨床心理学検査等に参加しています。また、多くの方々にASDを理解していただくために、下記のようなさまざまな活動を行ってきました。自閉症サイエンスカフェーカフェで語ろう!!!自閉症 奇数月の22日にASDの当事者、ご家族、一般市民、療育・支援の専門家および教員が集まり、さまざまな情報交換が行われています。

(URL: <https://kodomokokoro.w3.kanazawa-u.ac.jp/event/cafe.html>)

市民公開型学術集会「金沢大学子どものこころサミット」

世界自閉症啓発デーブルーライトアップat金沢 毎年4月2日に主催組織の一員として参加しています。金沢城石川門、JR金沢駅、金沢港周辺施設を自閉症のテーマカラーである青色にライトアップします。

自助グループの活動の後援 認定NPO法人と共に当事者活動やセミナー開催を行なっています。石川県内の幼稚園・保育園や小中高校への巡回相談、放課後等デイサービス事業所での講演会など、発達障がいに関する知識の普及にも努めています。

おわりに

当センターには、出身国、年齢、経歴が異なる教職員、大学院生が集まっています。今後も多様な人材を受け入れ輩出しながら、研究成果を教育・介護支援の現場に還元できるようにし、アジアひいては世界的な小児発達学の研究・教育の拠点形成に向けて努める所存です。

十全同窓会の皆さまには、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

なお、紙面の都合で多くの説明を簡略化しました。下記ホームページもご覧いただけましたら幸いです。

(横山 茂：記)

子どものこころの発達研究センター



連合大学院小児発達学研究科金沢校



スタッフ

教授(センター長) 横山 茂
准教授 廣澤 徹
特任准教授 藤田 慶大
助教 池田 尊司
特任助教 田中 早苗、矢追 健
博士研究員2名、大学院生20名、MRT1名、
事務補佐員2名、技術補佐員1名

研究分野の沿革

平成19年 金沢大学子どものこころの発達研究センターが設置された。
平成20年 大阪大学・浜松医科大学がスタートさせた文部科学省連携融合事業「子どものこころの発達研究センター」に参加した。
平成21年 大阪大学大学院連合小児発達学研究科(大阪大学・浜松医科大学・金沢大学の3大学)が設立された。
平成24年 同研究科に福井大学・千葉大学が加わり、5大学の連合大学院となり、現在に至る。

肝胆膵・移植外科学 小児外科学

診療

主に肝胆膵がん治療と肝移植治療を行っており、日本海側では唯一の脳死肝移植認定施設です。私の赴任後は5例の生体肝移植と1例の脳死肝移植(金沢大学で累計91例)を行いました。肝移植医療は領域が多岐に及ぶため、消化器内科、麻酔科、集中治療部、薬剤部、栄養部、リハビリテーション部門との連携やコミュニケーションを大切にしております。がん治療においてもチーム医療は重要で、週一回の多診療科で構成されるがん診療ユニットで内科・外科の全ての初診患者さんの治療方針を検討しております。昨年は腹腔鏡下膵頭十二指腸切除手術を導入いたしました。今後も低侵襲手術を積極的に選択すると同時に、生体肝移植の血管再建技術を取り入れた拡大手術も症例に応じて行っております。また4月からロボット支援肝切除なども保険収載されましたので、今年度中にロボット支援手術を安全に導入することができるように準備しております。

教育

外科(胸部腹部4外科講座)合同の金沢大学外科アライアンス(通称KASA)を立ち上げ、外科医のリクルートと育成を



合同で行なっております。その中でも消化器外科医のキャリアは生涯にわたって肝胆膵分野と消化管分野は分けることはできませんので、消化管外科学教室と合同で支え、秀でた消化器外科医を多く輩出したいと思っております。金沢大学及び関連病院がアクティビティーを維持して地域医療に貢献するためには、大学での高度な医療の推進とそれを担える外科医の育成の実績が最も重要であり、今まで以上に連携病院との前向きな協力体制が必須と考えます。小児外科領域に關しましては、鼠径ヘルニアなどの一般手術から新生児外科、悪性固形腫瘍、肝移植などの高難度手術に至るまで全ての小児外科疾患に安全で質の高い医療を提供してまいりたいと思っております。

研究

肝胆膵がん研究(がん免疫、活性型血小板の役割、患者由来同所性腫瘍移植モデル:PDOXを用いたがんの個別化医療の構築など)に加え、広範肝切除の

肝再生・虚血再灌流障害、肝類洞閉塞症候群、肝移植に関する研究を行っております。基礎講座の先生方(山本教授、原田教授、華山教授、高橋教授)のご支援のもと、大学院生を中心に頑張ってもらっており、血管吻合など、臨床にも応用できるマイクロサージャリー技術を用いた動物モデルを用いて臨床にもフィードバックできるような研究もしていただいております。

おわりに

肝胆膵・移植分野における北陸最後の皆としての使命を果たすこと、外科医のリクルートと育成をすること、世界に誇れるような研究を発信することを当面の目標として邁進してまいりたいと存じます。十全同窓会の先生方におかれましては今後ともご指導のほど、何とぞよろしくお願い申し上げます。

(八木真太郎:記)

スタッフ

教授 八木真太郎
 助教 牧野 勇(医局長)、中沼 伸一、岡崎 充善
 特任助教 酒井 清祥(小児外科長)、高田 智司、蒲田 亮介
 医員5名、大学院生13名、事務補佐員2名、技術補佐員1名

研究分野の沿革

金沢大学の外科講座は2020年に4つの講座として再編されましたが、肝胆膵・移植分野は第一外科の久留 勝教授が本邦初の膵頭十二指腸切除を、第二外科の本庄一夫教授は本邦初の肝門部胆管がんに対する肝切除を施行されました。三輪晃一教授は上腸間膜動脈合併膵頭十二指腸切除手術の開発や生体肝移植の導入を果たされ、太田哲生教授が継承し発展させました。当教室は日本膵切研究会と日本胆膵病態・生理研究会の事務局を有し、肝胆膵外科領域で全国屈指の歴史があります。

金沢大学医学生と「生と死」を考える： 麻酔科蘇生科での緩和医療実習の報告（その4）

金沢大学附属病院麻酔科蘇生科(緩和ケアセンター)

山田 圭輔

筆者が担当する医学類5年生の緩和医療臨床実習では、「これまでに人の生と死を考えさせられ、深く共感した書籍、映画、芸術、自分の経験などを1つ選び、人は苦境の中をいかに生きることができるのかに関する自分の考えを皆に紹介しなさい」との課題を与え、レポートにまとめさせてきた。

実習のテーマとして、全人的医療の心を表す言葉「治すことときどき、和らげることしばしば、慰めることいつも」を掲げていることから、これに関連したレポートが多く提出されている。本稿では令和3年度5年生3名(中田祐輔、赤松潤、宮内英行)のレポートを紹介する(写真1)。

1)「国境なき医師団」を見に行く (いとうせいこう、講談社)

国境なき医師団(MSF: Médecins Sans Frontières)に同行した筆者のインタビューをまとめた単行本で、今回はウガンダ訪問時のエピソードを紹介した。

2013年から17年にかけてウガンダには100万人もの難民が流れこみ、彼らの多くは自宅や財産を奪われ、性暴力にあい、身も心も傷ついた状態だった。MSFは、難民キャンプでのワクチン接種やコレラ対策、産科治療や衛生教育などさまざまな活動を行っているが、どこのキャンプにも必ずメンタルケア施設がある。多くの問題が存在する中でメンタルケアは優先されており、難民だけではなく、救援に向かう者にも必ずメンタルケアを受けさせている。MSFは創傷を治すだけでなく、国際問題を根本的に解決できなくても、お互いの心の傷を癒そうと努力していることが分かる。

近年の日本では、理不尽な暴力や戦争に遭遇する機会は少なく、生活の中に娯楽も多く、メンタルケアに関して医学類で学ぶことは少ない。しかし悪性腫瘍や循環器疾患など治らない理不尽な病気を抱えて生活するなかで辛い気持ちを抱えている人は多く存在する。医療者が患者の心に向き合っ

た診療を行うには、「治すこと時々、和らげることしばしば、慰めることいつも」の理念を持ち、常に想像力を働かすことが必要なのだと感じた。また、現実や想像力の中で奮闘する医師にもメンタルケアが必要になるのだろうと感じた。

2)安楽死と尊厳死： 医療の中の生と死 (保坂正康、講談社新書)

この本を読み、人の尊厳について考えた。狭いベッドで寝たきりの状態で、点滴注射につながれ、膀胱カテーテルを挿入され、人工延命装置に囲まれ、意識が朦朧としても生命を保っている老人患者がいたとしよう。かつては社会で活動していたこの老人患者は、見た目には生ける屍しかばねである。この老人には人間としての尊厳が失われており、延命だけの医療はやめるべきだとの考えがあるかもしれないが、当人は自分の尊厳は失われていないと考えており、決めつけた考えを不快に感じることもある。

ある病院実習での私の体験だが、意識不明でICUに入院し多くの点滴やカテーテルにつながれている患者さんを、医師がスパゲティ状態と表現したことに不快な気持ちを抱いた。医療者自らが、患者さんの尊厳を傷つけているように思えたからである。おそらく治療のみに重点を置く医療者は、治療ができない時に人の尊厳を忘れてしまうのではないだろうか。

人は疾患を抱えた身体だけでなく、こころや精神(スピリット)を持つ存在であり、その面のケアも望んでいるのだ。医療者がこの認識を忘れてしまうと、患者さんや周囲の人は不快な気持ちになるだろう。私は今回の実習で、医療者が「治すこと時々、和らげることしばしば、慰めることいつも」の理念を忘れないことが、



写真1：医学生と緩和ケアチームスタッフ
佐伯(専門看護師)、須田(麻酔科蘇生科)、赤松、中田、筆者

最期まで患者さんの尊厳を保つ手立てになるのだと理解した。

3)湯を沸かすほどの熱い愛 (日本映画、2016年)

銭湯「幸の湯」を営む幸野家では、娘を残して父が1年前に家出してしまい、銭湯は休業状態であった。母・双葉は持ち前の明るさと強さでパート勤務をしながら娘を育てていたが、膵臓がんと診断され余命2か月を宣告される。死を受け入れた双葉は、幸野家の再生を目指して、残りの人生を生きると決意する。双葉の強い思いを受け、初めは双葉の死を受け入れられなかった家族も、次第に一つにまとまっていく。家族の優しさを感じた双葉が、自分の生を改めて見つめ直し「死にたくない、生きていたい」と涙を流す場面が、とても切なくて強く印象に残った。

患者本人とその家族では、死の受容の段階は異なる。本人は複雑な心理的段階を踏み「死の受容」に向かいながらも、常に精神は不安定になる。私たち医療者は、患者に対しても家族に対しても、常に心の拠り所となる必要がある。聖路加国際病院名誉院長の日野原重明先生は、「To cure sometimes, to relieve often, to comfort always」を「治すことは時々しかできなくても、和らげることしばしばできる、病む人の心の支えになることはいつでもできる」と訳した。これらを実践することで、本当の意味での医療者になるのだと思う。

金沢大学医学生と「生と死」を考える(アーカイブス): 手塚治虫作「火の鳥」から生と死を考える

金沢大学附属病院麻酔科蘇生科(緩和ケアセンター)

山田 圭輔

金沢大学医学生と「生と死」を考える実習は2009年度から開始し、2011年度からは全員のレポートを報告集(金沢大学医学生と「生と死」を考える)として編集してきた、これまでに1000を超える学生のレポートが集まり、過去の優れたレポートを選び抜いて、医学雑誌「ペインクリニック」に投稿し、緩和医療に関わる全国の医療者に紹介している。

医学生の中には、手塚治虫の作品が生と死を考える契機になったと紹介するものが少なからずいる。手塚は漫画の神様として広く知られているが、昭和20年3月の大阪大空襲を生き延び、大阪帝国大学附属医学専門部を卒業した医師で医学博士でもある。代表作であるブラック・ジャックや火の鳥を含めて、作品には人の生と死を考えさせる要素が多く含まれている。本稿では火の鳥を紹介した3名：山本泰資先生と酒徳直明先生(令和元年卒)および雲井洋文先生(平成30年卒)のレポートを紹介する¹⁾。

1)火の鳥(手塚治虫)

火の鳥は、人間の生命、死や輪廻転生を描き、人間の幸せとは何かを問う強いメッセージ性を持つ作品である。僕はこの作品を通して長く生きたい、死にたくないなど、生そのものに執着するよりも、どう生きるのか、何のために生きるのかを強く意識するようになった。死を受け入れるからこそ、人は生きる意味を求めることができるのではないだろうか。

なぜ生まれたのか、生きる意味は何なのかとの問いかけには、すぐには答えられない。人生においてずっと考え続けていくものだと思う。しかし、今をどう生きるかは自分次第だ。僕たちは日々、さまざまな出来事の中で生きている。必ずしも全ての出来事に意味があるとは言えない。時には理不尽なこと、納得できないこともあるだろう。しかしすべての出来事に対して自分自身が「意味」を付け加えることはできる。苦境に意味を見出そうとすることが苦境を生きるヒントになるのだと思う。

死は最後の苦境である「今をどう生きるか?」に加えて、「どう生きたか、生きた意味は何か」を振り返る大切な時間である。僕自身も死を前にして「生きた意味」を振り返られる人生でありたいと思っている。そのお手伝いをすることが緩和医療の役割であると思う。

2)火の鳥：復活編(手塚治虫)

西暦2482年のある日、少年レオナが墜落死したところから物語が始まります。彼は500年先の未来の技術により、半分以上が人工の体となって蘇ります。しかし、周りの人間が土くれのような歪な形をした無機物に見え、逆にロボットが人間の姿に見えるようになってしまいます。変わってしまった世界の中で彼は労働用ロボットであるチヒロ61298号に恋をし、多くの絶望を味わいながらも賢明にチヒロと共に生きる道を探します。レオナはロボットになりたいと願い、最期にチヒロと同一化し、2人は心を繋ぐことができるようになります。非常に切なく、感動できます。また、この作品にはもう一人の主人公である作業用ロボットのロビタが登場します。ロビタは逆に人間でありたいと悩み、もがき苦しむ姿が描かれます。

私はこの作品を通して、人間は他者との繋がりを持つことで苦境を生き抜くことができると考えました。自分が誰かのために、そして誰かが自分のために生きているという事実が困難に立ち向かう力を与えてくれると感じました。「火の鳥」復活編は、未来世界での言葉を話すロボットと人間との関わりを通して、人間とは何かを考えさせられる作品だと思います(写真1)。

3)火の鳥(手塚治虫)

さまざまな時代が火の鳥と共に描かれ、手塚は多くの問題を提起している。人はな



写真1：実習時の記念写真(2017年9月)

(後列左から)足利恵瑠、筆者、土田航祐、上野雄平、酒徳直明、岩科 慧、山本 悟
(前列左から)西川和希、守屋美知瑠

ぜ生きるのか、なぜ死ぬのか。人はどこから来てどこに行くのか。幸せとは何か、人間とは一体何だろうか。火の鳥の生き血を飲むと永遠の生命を得られるが、永遠の生命に意味があるのだろうか。これら多くの問題に対して、QOL(Quality of life)が一つの答えになると思う。ある人がどれだけ人間らしい生活や自分らしい生活を送り、人生にどれだけ歓喜や幸福を感じられたかという概念である。

手塚は、自分らしく生きるということ、己の人生に信念や意味づけを持つこととして訴えかけている。火の鳥に登場する主人公は、醜い容姿を持つ人間として、あるいは顔が獣である人間、クローン人間やロボットなど人間とみなされないものとして描かれることが多い。その主人公たちは、理解のない周囲から嫌がられ軽蔑されても、人間のように自分らしく生きようとしていく。どんな姿や形であっても、己が望む生き方を全うすることが必要なのだ。これは病気で身体機能が衰え、生活が困難な状況の人にもあてはまり、身体的苦痛や社会的苦痛のため活動性が低下しても、QOLを維持し高めることが可能であることに繋がると思う。

大きな苦悩や超えられない壁に遮られた時、自分はどう生きればよいのか、またどう死んでいけばよいのか、自分らしさとは何かを深く考えさせられた作品であった。

1)山田圭輔、山本泰資、雲井洋文、酒徳直明：金沢大学医学生との実習で火の鳥から生と死を考える。ペインクリニック2022；43：207-10

医師国家試験結果

コロナ禍の中で実施された第116回医師国家試験の合格者状況が、2022年3月16日、厚生労働省から発表されました。金沢大学医学類の合格状況も含めて報告いたします。

全国の受験者数は10,061名で、そのうち合格者は9,222名、合格率は91.7%（新卒者95.0%、既卒者54.0%）でした。男女別にみますと合格率は男性90.8%、女性93.4%で、合格者に占める女性の比率は33.7%でした。

金沢大学医学類では総数として120名が受験し、107名が合格で合格率89.2%（新卒者91.0%、既卒者66.7%）と、全国平均の91.7%を少し下回りました。この5年間における新卒者の合格率の推移は、96.5%（2016年度）、96.7%（2017年度）、96.2%（2018年度）、94.2%（2019年）、95.5%（2020年度）とほぼ横ばいとなっていました。本年度は91.0%とやや下降しました。新卒者の合格率が低下した大きな理由としましては、医学類医学教育カリキュラム改革によって新カリキュ

ラム（診療参加型臨床実習72週）となって学年進行した最初の学年であったこと、つまり例年までの上級生と同じようなペースでゆっくり国家試験対策を行っているが勉強時間が足らなくなることがあったのではないかと考えています。また、引き続きのコロナ禍で、こころの問題を抱えて受験にまで至った学生が一定数いたことや、グループ学習ができず自宅で孤立している学生がいたことが要因ではないかと考えています。教育委員会と医学教育研究センターでこの原因をさらに究明し、早期から十分な対策を講じ

て2022年度の新卒者にはぜひ100%を達成してもらいたいと願います。

金沢大学医学類医王保護者の会、学生支援委員会、教育委員会、医学教育研究センター、学年担任・副担任、チューター教員、学生課医学学務係の教職員は引き続き一丸となって、学生へのきめ細かいサポートを行っていきます。医学類ではシミュレーター実習室を充実し、より良い学習環境の整備を行いながら、次代を担う医師・医学研究者の育成に邁進したいと思います。

（杉山 和久：記）

第116回医師国家試験結果 ※（ ）内は第115回結果

	受験者	合格者	不合格者	合格率	全国平均
令和4年3月卒業生	111名 (111名)	101名 (106名)	10名	91.0% (95.5%)	95.0% (94.4%)
令和3年3月以前の卒業生	9名 (8名)	6名 (3名)	3名	66.7% (37.5%)	54.0% (54.5%)
合計	120名 (119名)	107名 (109名)	13名	89.2% (91.6%)	91.7% (91.4%)

金沢大学医学部 十全同窓会
会員情報変更受付

— LOGIN —

会員番号 (e半角数字)

パスワード (e半角英数字)

パスワードをお忘れの方 →

LOGIN NOW →

金沢大学医学部 十全同窓会
会員情報変更受付

(1) はじめての方は、事務簿より各会員様へお届けしております封筒に記載されている「会員番号」と「仮パスワード」を入力してください。入力やログインがうまくいかない場合は、下記お問い合わせ先までご連絡ください。
(2) 会員番号とパスワードが一致する方のみ、認証されます。入力内容にお間違えのないようご注意ください。
(3) 操作方法がわからない場合は、下記お問い合わせ先までご連絡ください。

連絡先の変更・ご異動の際は、
金沢大学医学部十全同窓会会員情報変更サイトをご活用ください

URL <http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp/member>

会員情報変更はこちら

ご不明な点は下記事務局へご連絡ください。



TEL : 076-265-2132

Email : juzen-ob@med.kanazawa-u.ac.jp

学生コーナー

10年後を見据えた 病院実習を行うために

医学類5年

彦田 藍子

私たち5年生は、昨年9月にCBT・OSCEを終え、11月より念願の病院実習を始めました。今日はどんな患者さんに出会えるだろうか、どんなことを学べるだろうかと胸を躍らせる一方で、先生の前で症例報告をする日にはうまくできるだろうかとドキドキするような刺激的な毎日を過ごしております。深夜まで翌日の予習や発表準備を行い、どんなに眠たく感じる朝でも、ケーシー型白衣に着替えれば不思議と目が覚め、気分十分で病院に向かいます。この原稿を書いている4月現在は、40週にわたる診療参加型臨床実習「コア・ローテーション」の約半分を終えております。コア・ローテーションでは金沢大学病院とその教育提携病院にて内科・外科・小児科・産婦人科・精神科・総合診療科・救急科をローテートします。コロナ禍においても私たちが充実した実習生活を送れているのは、受け入れてくださる病院の先生や、交渉してくださっている医学学務系の皆さまのご尽力、そして十全同窓会の皆さまの暖かいご指導とご支援の賜物と、深く感謝しております。

さて、私は入学時より学年代表を務めており、役割の一環として、年に数回、教育委員会や医学教育センターの先生方に、カリキュラムについて意見を申し上げる機会をいただいております。その度に先生が、私たちがどんな学びを求めているのかを理解し、実行しようと試行錯誤してくださっていると感じ、大変有り難く思っております。同時に、学生の要望を伝えることの大切さも感じております。今回の学生コーナーを執筆する機会をいただきましたので、私が実習で多くの先生にお聞きしたいと思っている話題について書くことに致しました。同窓会の皆さまの中にも、学生の指導を担当してくださっている先生がいらっ

しゃるのではないのでしょうか。個人の意見ですが、参考にいただければ幸いです。

私がこれまでの実習で先生から教えていただけて良かった、今後ローテートする科でもぜひお聞きしたいと思っている話題は3つあります。1つ目は、先生が今の診療科を選ばれた理由についてです。私たち医学生は、入学してから、早ければ医学部を受験すると決めた頃から、次のような問いかけを幾度となくされてきました。それは、「何科医になるの?」という問いです。私のように将来の道に迷いに迷っている医学生にとっては、聞かれたくない質問ナンバー1です。特に、友人が会話を広げようと振ってくれたその質問に対して、「今ほどの科にも興味があって、なかなか決められないんだ」と答え、会話を強制終了してしまう時の気まずさといたまれなさは、あまり味わいたくないものです。私は病院実習の目標を大きく2つ定めており、1つは当然のことながら実臨床を通して医学の知識を深めることにありますが、もう1つは、今まではっきりと答えられなかったその問いの答えを探すことだと思っています。ですから、実習先の先生に志望科を聞かれることは、「まだ迷っています。先生はなぜ今の診療科を選ばれたのですか?」と、私がお聞きしたい1つ目につなげる良いきっかけとなるので大歓迎です。すでにその大きな決断をされた先生のお話は、私たちが進むべき診療科や臨床研修病院を決める大きなヒントになります。例えば、これまでは、病院実習や臨床研修の際に、その診療科の雰囲気が好きだったから選んだ、という意見を多くお聞きしました。そのような意見を聞き、病院実習や見学時には積極的にカンファレンスや勉強会に参加し、雰囲気を感ぜられる機会を大切にしようと思えることができました。また、各診療科に独特の理由を教えてくださいと先生もいらっしゃいます。その理由が、私が考えたこともないような視点から見たその診療科の良さを表していることも多く、その診療科のイメージが大きく変わったという経験もありました。

2つ目は、先生がこれまでどのようにキャリアを積んでこられたのかという話

題です。私たちはよく「5年後、10年後の自分をイメージできるようにしなさい」と言われます。実習が始まる前までは、「1年後の自分すら想像できないのに…」と思っていました。たくさんの尊敬する先生と出会い、5年後、10年後になりたいイメージを持って初めて、今進むべき道を決めることができるのかもしれない、と思うようになりました。ですが、私たちのような医学生が、0から10年後の自分像を築き上げることは難しく、そのためにはロールモデルが必要です。私は、1人の先生をロールモデルとして、その後を追いかけるのではなく、いろんな先生がどのようなお考えでご自身のキャリアを積み重ねてきたのかを知り、自分が真似したいと思うお考えを、贅沢にもいいとこ取りすることで、自分のキャリアを想像していきたいと考えております。学生から「先生は卒後何年目ですか?これまでどのように働いてこられたのですか?」などと不躰な質問をすることは躊躇われますが、内心多くの学生が聞いてみたいと思っています。診療科によっては、学生全員でキャリアについてゆっくりお話を聞く機会を作っていただけることもあり、大変有り難く思っております。

3つ目は、これまでとは大きく変わって、勉強法に関する話題です。色々な診療科を回っていると、勉強したい項目が次々に出てきます。身体所見をうまくとれない、検査値の解釈が分からない、抗菌薬のことが全く分からない、画像も心電図も読めない、などと悩みは尽きません。そんな時に、若手の先生が、ご自身が学生の時に読んで良かった参考書を教えてくださいと、大変有難かったです。臨床医が思う、学生のうちに勉強しておくべきことと、その方法を示していただけると、より高いモチベーションで学習することができます。以上、厚かましくも私が実習で先生にお聞きしたいことを3つ挙げさせていただきました。

最後になりますが、熱心に指導して下さる先生や協力して下さる患者さんのご期待を裏切らぬよう、これからも精一杯実習に励みます。皆さまご指導よろしくお願い致します。

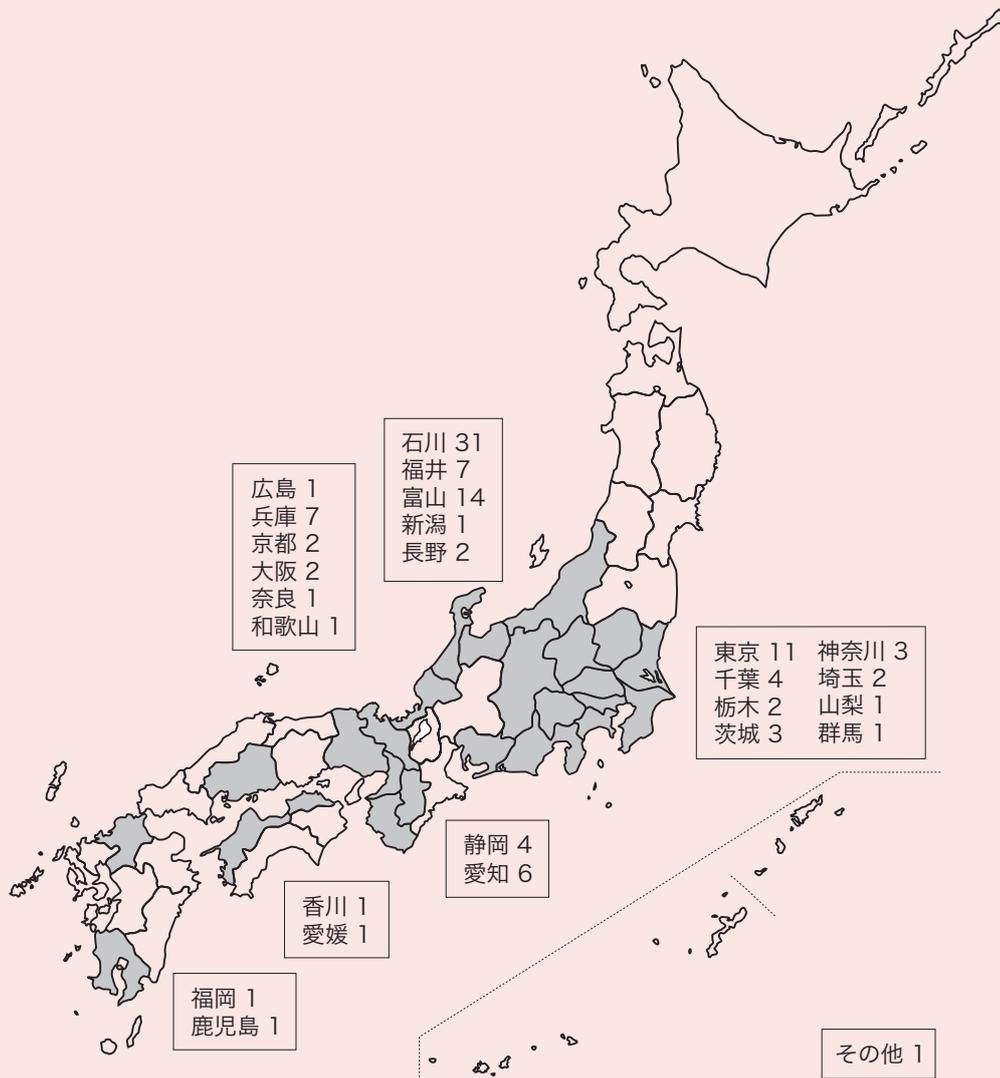
令和4年3月卒業生進路

青木 勇樹
青木 涼
青山 知裕
安東 駿
石田 羽海
石田 貴大
伊藤 恵祐
伊藤 崇平
伊藤 夢絃
伊藤 佑輔
井村 遼平
岩上 泰士
岩崎 秀幸
上田 太郎
戎井 孝志
大熊 康祐
大西 勇輔
大橋 純頼
小川 和浩
小川 風吹
沖野 遼
奥田 忠宏
奥村 秀生
尾山 遼
笠井 佑樹
梶原 佑一
片山りか子
加藤 裕之
金原 俊史
鎌田 大基
上出 貴洋
上手 万里
川崎 春奈
絹谷 耕平
吉良 和貴
黒阪 幸輝
小島 明穂

小嶋健太郎
小堀 蓮太
齊尾朱佑弓
阪井 祐介
酒井 椋平
堺堀 裕子
坂賀 綾
桜井 佑基
佐藤 佑哉
芝 美咲
將積 晃
白木 重光
菅野 菜月
杉本 惇子
杉山 丈実
瀬尾 僚太
高柳 幹
舘下 大地
辻 直毅
土田 峻介
永井玲於奈
中川友加里
中野絵里加
中村 慶乃
中谷 友香
中山 耀平
奈須 仁克
西尾 建紀
西村 駿助
根岸 遼
野中 大輝
野中 華子
橋本 未紅
長谷川敦也
長谷川雄大
林 拓人
林 瑞希

百留 和馬
平尾 優典
平野 葉香
深澤 魁人
福井 峻平
福島 正治
藤井 俊
藤塚偉利哉
二木あずみ
星 和宏
細野雄二郎
堀 雄希
本多 樹
増田 恵司
真智 耕介
松井 洋史
松井 里佳
松本 星貴
眞鳥 優規
真鍋 卓朗
三浦 悠平
美濃 剛志
元木 優里
矢加部 碧
矢崎 陽
藪亀 遼平
山岸 将大
山口 峻輝
山崎 智洋
山下 凌平
横山 遥貴
吉川 琢馬
吉田健太郎
吉田 建人
吉田 遥香
吉峰 玲
吉村 颯仁

令和4年度 医薬保健学域医学類入学者 出身都道府県調査



寄附制度のご案内(金沢大学医学教育研究支援寄附金)

近年、国立大学法人の改革強化・促進が国の施策として急速に進められる中、医学類・医学系においても、実施すべき事業が次々と生じております。本来ならば、これらの事柄は大学の予算により実施すべきところですが、昨今、本学の財政状況は逼迫しており、部局に対して十分な予算措置が行われない状況です。

医学類・医学系としては、自助努力の方策を模索せざるを得ず、その一環として、平成26年9月に本学類・系が行う教育・研究に役立てることを目的とした「金沢大学医学教育研究支援寄附金」を起ち上げ、支援事業を推進して参りました。

本学の医学教育研究のさらなる充実発展のため、同窓会会員の方々におかれましては、今後とも格別の御支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

金沢大学 医薬保健学域医学類長
医薬保健研究域医学系長
杉山 和久

【担当(お問い合わせ先)】

〒920-8640 金沢市宝町13-1 医学類B棟1F
金沢大学医薬保健系事務部会計課経理係
Tel : 076-265-2115
E-mail : t-keiri@adm.kanazawa-u.ac.jp

【お申込方法について】

- 電子メール又は電話でのお申込み
上記担当まで電子メール又は電話にてご連絡ください。折り返し、申込書を送付させていただきます。
現金のお持ち込みにより、ご寄附いただくこともできますが、その場合も上記方法によりあらかじめご連絡いただけますと幸いです。

【税法上の控除について】

- 寄附者が個人の場合は、所得税法上の控除対象となる寄附金として、確定申告の際、所得から控除され、税法上の優遇措置を受けることができます。また、石川県内在住者の寄附は、石川県や県内市町村からの個人住民税の控除を受けることができます。(※所得税法、地方税法ともに2千円を超える寄附額から控除対象となります。)
- 寄附者が法人の場合は、法人税法上の全額損金算入が認められる寄附金として、法人の所得から控除でき、税法上の優遇措置を受けることができます。

会費納入のお願い

同窓会事業は皆様からの会費により支えられています。
会費納入にご協力くださいますようお願い申し上げます。

会費納入方法をお知らせいたします。

①自動引き落とし(手数料本会負担)

本年度より取り扱いを開始いたします。お手続き希望の方はご連絡先を事務局宛にお知らせください。
折返し「銀行口座自動振替手続きの書類」をお送りいたします。
是非この機会にご検討くださいますようお願いいたします。

②払込用紙(手数料本会負担)

従来通り同封の「払込取扱票」をご利用ください。

③銀行ネット決済(ネットバンキング)

下記銀行口座へ直接お振り込みが可能です。
(お振込の際は、ご氏名の前に会員番号のご入力をお願いいたします)

北陸銀行 小立野支店

普通預金 6051047 金沢大学医学部十全同窓会 会費口

問合せ先

金沢大学医学部十全同窓会事務局

TEL: 076-265-2132 FAX: 076-234-4208 Email: juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

金大病院コロナ基金へのご支援のお願い



附属病院長
蒲田 敏文

十全同窓会会員の皆様へ

当院は2020年4月より新型コロナウイルス感染症の患者を受け入れ、50名を超える重症患者に対し人工呼吸器やECMO等による集中治療を行ってきました。写真にあるように40名を超えるスタッフからなるCOVSAT(Covid Special Assistant Team)の献身的な治療により、多くの重症患者は感染症を克服し、元気に歩いて自宅に戻ることができました。

今後も金沢大学病院は職員一丸となって、新型コロナウイルス感染症患者の治療に頑張っています。同窓会の皆様には、当院へのご支援のほど宜しくお願い致します。すでにご支援いただいた同窓会員様には、心より感謝申し上げます。



(COVSATによる腹臥位療法)

■お申込方法

金沢大学附属病院 新型コロナウイルス感染症対策基金

金沢大学附属病院ウェブサイト内の専用ページにて、お手続き願います。

https://web.hosp.kanazawa-u.ac.jp/oshirase/2020covid19_kifu.html

▼お申込みフォームへ



■お問い合わせ先

金沢大学 病院部 経営管理課 予算企画係 電話: 076-265-2066(直通) E-mail: hpyosan@adm.kanazawa-u.ac.jp

金大病院コロナ基金

検索

MERCAZOLE

抗甲状腺剤

処方箋医薬品^{注)}

薬価基準収載

メルカゾール[®]錠2.5mg

MERCAZOLE[®] TABLETS 2.5mg

日本薬局方 チアマゾール錠

抗甲状腺剤

処方箋医薬品^{注)}

薬価基準収載

メルカゾール[®]錠5mg

MERCAZOLE[®] TABLETS 5mg

日本薬局方 チアマゾール錠

注)注意—医師等の処方箋により使用すること

■効能又は効果、用法及び用量、警告・禁忌を含む使用上の注意等については電子添文をご参照ください。



製造販売元[文献請求先及び問い合わせ先]
あすか製薬株式会社
東京都港区芝浦二丁目5番1号

販売元

武田薬品工業株式会社
大阪府中央区道修町四丁目1番1号

2021年9月作成



Lilly

世界中の人々の
より豊かな人生のため、
革新的医薬品に
思いやりを込めて

日本イーライリリーは製薬会社として、
人々がより長く、より健康で、充実した生活を実現できるよう、
がん、糖尿病、筋骨格系疾患、中枢神経系疾患、自己免疫疾患、
成長障害、疼痛などの領域で、日本の医療に貢献しています。

日本イーライリリー株式会社

〒651-0086 神戸市中央区磯上通 5-1-28
www.lilly.co.jp

医療情報サービスに、 新たなシナジーを。

4月1日、PSPとNOBORIは、生活者、医療従事者、社会とが医療情報を共有し、より利便性の高いサービスを提供するため合併いたしました。

PSP株式会社 **NOBORI Ltd.**

PSPは、生活者と医療機関と地域とが連携して、医療サービスに関する資源を分かち合い、生活者自らが医療の担い手であるという意識のもと、医療を支えていく。そんな未来に向け、これからの健康な社会を支える医療情報インフラの構築を目指し続けます。



PSP株式会社 <https://www.psp.co.jp> お問い合わせ promo@psp.co.jp

真のソリューションを実現する 価値あるサポート。

医療機器・科学機器の技術を強みとする商社

明日の健康と新産業創造のパートナー
 **丸文通商株式会社**

〒920-0385 石川県金沢市松島一丁目40番地
TEL 076-269-1880 FAX 076-269-2522
<http://www.marubun-tsusyo.co.jp/>

nihon
medi+physics

for the happiness



明日の幸せを願い、「診る」そして「治す」核医学。

私たちは、がんや心臓病、脳血管疾患および認知症などの早期発見に役立つSPECT・PET検査用放射性医薬品や、がん治療用の医療機器、治療薬などの創出を通じ、これからも皆様の健康に貢献します。

〒136-0075 東京都江東区新砂3丁目4番10号 TEL (03) 5634-7006 (代) <https://www.nmp.co.jp/>

 日本メジフィジックス株式会社

2020年6月作成

ホテル日航金沢

城下町・金沢を彩る“舞台”という発想のホテルです。
地上30階、高さ130mは北陸随一のスケールを誇り、多彩で充実した施設と
きめ細やかなおもてなしで皆様をお迎えいたします。

一期一(縁)のおもてなし。

〒920-0853 石川県金沢市本町2-15-1(JR金沢駅兼六園口前)
Tel: 076-234-1111 Fax: 076-234-8802

ホテル日航金沢 www.hnkanazawa.jp

会報編集委員の紹介

学内編集委員(14名)

蒲田 敏文
中村 裕之
横山 茂(副編集委員長)
絹谷 清剛(編集委員長)
佐々木素子
篁 俊成
和田 隆志
杉本 直俊
谷口 巧
山本 靖彦
中田 光俊
倉知 慎
毎田 佳子
濱口 儒人

学外編集委員(21名)

山口 成良
佐藤 保
三輪 晃一
橋本 琢磨
中村 信一
勝田 省吾
山本 健
山本 博
山岸 正和
太田 哲生
大村 健二
横山 仁
大島 徹
横山 修
中本 安成
高村 博之
常山 幸一
古川 健治
古市 賢吾
若山 友彦
中西 清香

以上35名で構成されています。

土屋弘行十全同窓会理事長には、
編集委員会にご参加いただいております。



表紙の写真

宝町キャンパスの桜

2022年の春は、4月4日に金沢大学本部棟前の標本木(ソメイヨシノ)で桜の開花が確認され、和田隆志新学長による開花宣言が行われました。写真は、満開の頃の宝町キャンパスの様子です。

題字：山本 健(十全同窓会会長)

発行：金沢大学医学部十全同窓会
会報編集委員会
〒920-8640 金沢市宝町13-1
<http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp>

発行日：令和4年5月30日

印刷：能登印刷株式会社

会費納入のお願い

同窓会事業は皆さまからの会費により支えられています。
十全医学会とは別組織であることをご理解ください。

編集後記

新年度が始まり、桜満開の宝町キャンパスに学生さんが戻ってきました。講義室の前でたむろして談笑する姿、ケーシー、スクラブに身を包み、パタパタと附属病院に走る姿などを見るのは、久しぶりです。コロナ禍の2年余り、医療現場はもとより、大学の教育現場でも、オンライン講義など臨機応変の対応が求められてきました。Withコロナであるとしても、早く本来の大学生活に戻ることを願うばかりです。

今年度最初の会報181号をお届けします。皆さまのお手元に届くのは、緑が濃くなる頃でしょうか。和田隆志先生の学長就任挨拶、医学系関連の各長の就任挨拶、卒業生に贈る言葉、金子教授の退職ご挨拶、医師国家試験結果、卒業生進路などが掲載されています。なかでも、和田先生の

学長就任はビッグニュースです。金沢大学の顔として大学全体の舵取りを担う大役で、国際的な発展と地域貢献の両面に手腕を発揮されることを期待しています。ご苦労も多いとは思いますが、皆で応援していきたいです。先生は私の同級生であり、学生時代は共に、山ちゃんの解剖実習などに苦労した(?)はずですが、その頃には、同級生が学長になるとは全く想像できませんでしたが、皆大変誇らしく思っています。

今後も会報を通して、母校の現況、会員の皆さまの活躍をお伝えして、会員相互の親睦の場となれるよう努めます。皆さまの率直なご意見をお寄せいただきますよう、編集委員一同お待ちしております。

(佐々木素子：記)